



短期大学コンソーシアム九州 紀要
『短期高等教育研究』

Vol.10 短期大学コンソーシアム九州

巻 頭 言

2011年3月に短期大学コンソーシアム九州の研究紀要第1巻を刊行してはや10年。私自身、創刊号の巻頭言を書き本研究センターの研究活動を推進し、この3月本務の九州大学を定年退職しました。巻頭言をお願いすべき方がまだ多くおられるなかで、僭越ながらそろそろ「中締め」でもあろうかと2回目の巻頭言執筆をお引き受けしました。

どのような組織も自らをふりかえること、自省が大切です。みなさまとともに、「^{コミュニティ・カレッジ}地域を愛する短期大学」「^{フレンドリー・コンペティション}地域に愛される短期大学」のための「^{フレンドリー・コンペティション}友好的な競争（ジョイス・津野田先生）」「戦略的パートナーシップ（吉本）」を目指して、2002年9月に当時の安部直樹長崎短大学長とともに共同世話人として「短期大学の将来構想に関する研究会」を発足させ、2009年9月に「短期大学コンソーシアム九州（JCKK）」発足の後は、研究センターにおいて協働の研究開発を進めてきました。ここでは、共通の目標として「JCKKスタンダード」に焦点を当ててきました。それは、第一に短期大学が探究する学修成果目標の公約数的な「共通性」の共有、第二に地域社会の期待や建学の精神に応じて各短期大学が展開する「卓越性」を切磋琢磨し学習すること、そして第三にコンソーシアムの共同事業が育む「コミュニティ」形成の基準です。少し私なりにこの「スタンダード」のふりかえりのポイントをお話したいと思います。

2018年の中教審の『高等教育のグランドデザイン』は、「多様性と柔軟性」をスローガンとしていますが、その多様性の中身について、特に地域の職業実践的な人材養成の観点について語ることは必ずしも多くありません。JCKKが、地域に愛される短期大学としてのスタンダードをどう確立していくのか。それは、スタンダード構築の過程における、^{ステークホルダー}関係者との日常的な交流の積み重ねだと考えています。短期大学の内部に閉じこもることなく、関わりある地域のさまざまな声に耳を傾け、「地域に造られ地域を造る」存在になっていくことが大切でしょう。内部と外部とを峻別することなく、柔軟にその往還をできるのがコミュニティのカレッジ、カレッジのあるコミュニティだと考えるわけです。

研究会18年を振り返り、研究会発足時から研究センター活動に関わるメンバーも少しずつ入れ替わりました。第1号執筆者14名の中でも10名はそれぞれに他の活動に移っていますが、またそれぞれの場で、この「スタンダード」に向かう精神を発揮しておられることだろうと思います。本号の各論考もまた、「スタンダード」に向かう、そのエビデンスです。どうぞ、その検証とアドバイスをお願いしたいと存じます。

2020年12月 社会的距離をのり越えるコミュニティ形成に向けて

短期大学コンソーシアム九州研究センター長
滋慶医療科学大学院大学教授
九州大学名誉教授 吉本 圭一

短期大学コンソーシアム九州紀要 『短期高等教育研究』

目 次

巻頭言	吉本 圭一	1
研究ノート		
学修成果の JCKK スタンダード構築に向けて－7 短期大学の「学位授与の方針」に係る指標の比較分析－	平田 孝治 安部恵美子 藪 敏晴 吉本 圭一	5
報告		
短期大学における調査研究の活用スタンダードを目指して	中濱雄一郎 小浦 康平	21
資料		
短期大学コンソーシアム九州による調査スタンダードの制度設計	武藤 玲路 渡邊 和明	29
短期大学コンソーシアム九州関係者の調査・研究活動の記録		47
紀要編集委員会から		
『短期高等教育研究』編集規程		53
『短期高等教育研究』投稿規程		54
『短期高等教育研究』原稿執筆要領		55
編集後記	伊藤 友子	

Contents

Foreword	Keiichi YOSHIMOTO	1	
Research Reports			
Investigation of the Common Learning Outcomes for Junior College Consortium Kyushu (JCKK)			
Commonality of the Course-Level Learning Outcomes Related to the Diploma Policies of the Seven Junior Colleges			
.....	Koji HIRATA Emiko ABE Toshiharu YABU Keiichi YOSHIMOTO	5	
Reports			
Aiming for the Standard of Applications of Research and Study in Junior Colleges			
.....	Yuichiro NAKAHAMA Kouhei KOURA	21	
Research Materials			
Institutional design of the research standard by the junior college consortium Kyushu			
.....	Ryoji MUTO Kazuaki WATANABE	29	
The Records of Research Activities by the Persons concerned with Junior College Consortium Kyushu			47
From the Editorial Committee			
Regulations for Editing		53	
The Rules for Contribution		54	
The Essentials for Writing Articles		55	
Editor's Postscript	Tomoko ITOH		

【研究ノート】

学修成果の JCKK スタンダード構築に向けて
7 短期大学の「学位授与の方針」に係る指標の比較分析

Investigation of the Common Learning Outcomes
for Junior College Consortium Kyushu (JCKK)

Commonality of the Course-Level Learning Outcomes Related to the Diploma Policies of
the Seven Junior Colleges

平田 孝治*¹

安部恵美子*²

藪 敏晴*³

吉本 圭一*⁴

Koji HIRATA

Emiko ABE

Toshiharu YABU

Keiichi YOSHIMOTO

要旨 教育目標のタキソノミーは、教育基本法等に基づいて教育段階別に示されている。しかしながら、高等教育機関においては、学修到達目標や成果のコアモデルなどの指標となる標準的レベルは、資格要件を除いては、明確にされていない。短期大学は、短期大学士を授与する高等教育機関に分類されるが、四年制大学との違いや国際的な通用性の観点からも、その学修成果目標を適切に設定することが重要である。短期大学コンソーシアム九州 (JCKK) では、7 加盟校の、教育課程のディプロマ・ポリシーをテキストマイニング手法により調査分析し、中核となる学修成果目標「JCKK スタンダード」を編纂して検討した。保育系コースと総合ビジネス系コースについて、コンピテンシー概念に基づいてそれぞれの JCKK スタンダードをまとめ、実際の短大・大学のものと比較検討した。結果、前者は用語の解釈を明確化することで、およそ指標としての有効性を確認することができた。また、後者は職業分野が広いために概略的なものとなるが、およそスタンダードとしての一つの方向性が示された。

キーワード 教育の目標、学修成果目標、学修成果

* 著者紹介

*¹ 西九州大学短期大学部地域生活支援学科教授
〒840-0806 佐賀県佐賀市神園三丁目18-15
e-mail: hirata@nisikyu-u.ac.jp

*² 長崎短期大学学長
〒858-0952 長崎県佐世保市椎木町600番地
e-mail: emiko@njc.ac.jp

*³ 佐賀女子短期大学地域みらい学科教授
〒840-8550 佐賀県佐賀市本庄町本庄1313
e-mail: yabu@asahigakuen.ac.jp

*⁴ 短期大学コンソーシアム九州研究センター長、滋慶医療科学大学院大学教授、九州大学名誉教授
〒532-0003 大阪市淀川区宮原1-2-8
e-mail: k-yoshimoto@ghsj.ac.jp

1. 研究の課題

本稿は、JCKK 加盟短大が開設する教育課程のディプロマ・ポリシー (DP) と、そこに書き添えられる学修成果目標の文言をもとに、テキストマイニングの方法を用いて、その共通性を探り、JCKK の学修成果にかかる標準 (JCKK スタンダード) を構築するための検討を行う。ここでは、専門領域として、専門的職業の養成に特化した保育系と、特定の専門職に焦点を絞らない領域として総合ビジネス系 (総合系) に焦点をあてて、それぞれに学修成果の JCKK スタンダードの試作版を提示する。

2. 研究の背景

2.1 地方発の教育研究コンソーシアム

本研究の課題は、2001年に発足した「短期大学の将来構想に関する研究会」（以下「研究会」と略）がその当初から構想していた短期大学教育のスタンダードを構築するタスクの一端をなしている。この研究会は、短期大学に関わる中央の政策を機械的に現場に適用するのではなく、地方地域の短大教育の現場をもとにして短期大学の将来を構想していくことを目指して、当時の安部直樹長崎短期大学学長と吉本圭一九州大学助教授が、九州各県の短期大学と高等教育研究者に呼びかけ、短期大学の研究と教育のコミュニティとしてスタートした。その後、2009年には、この「研究会」に参加した北部九州7短期大学が「短期大学コンソーシアム九州」（以下JCKKと略）を結成したことで、組織的に、このJCKKのもとに置かれた「短期大学コンソーシアム九州研究センター」（以下「研究センター」と略）が、この「研究会」を企画・運営していくこととなった。先導的、戦略的な教育改革事業を通じた教育開発をJCKKが行い、そのためのスタンダードづくりの研究を「研究センター」が行うという体制である。これまで「研究会」に参画してきた短期大学は、現在JCKKを構成する7短期大学（香蘭女子短期大学、精華女子短期大学、九州龍谷短期大学、佐賀女子短期大学、西九州大学短期大学部、長崎短期大学、長崎女子短期大学）だけでなく、近畿大学九州短期大学、東海福岡短期大学、福岡工業大学短期大学部、福岡女子短期大学の4短期大学が、同「研究会」の各時期にそれぞれの役割を担い、それら関係する短大の多数の教職員がこの「研究会」での研究開発に携わってきた。また、個人単位での参加メンバーとして、現在の「研究センター」では研究センター長の吉本圭一（九州大学）、研究員の伊藤友子（熊本学園大学）および稲永由紀（筑波大学）が参加している。これまでも、多数の高等教育研究者が、それぞれの時期にこのスタンダード構築のタスクに参加してきた。

本稿で検討する学修成果のスタンダード構築は、「研究センター」の「研究会」の企画運営、研究紀要の編集発行と並ぶ中核的活動のひとつであり、そのさまざまな関係者の議論をまとめていこうとするものである。これまで上述の多くの関係者がここに参加しながら、短期大学のもつ個性、多様性が強調される環境のもとでその集約としてのス

タンダード提示には、日本の第三段階教育に係る政策と現実のもとで、さまざまな取組が必要だった。本稿は、そうした実践的開発を総合する成果のひとつである。

2.2 中央からのグランドデザインの多様性と柔軟性

短期大学に関して、中央の文教政策のなかに適切に依拠しうるレファレンスは限られている。2018年には、中央教育審議会（2018）は『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン』（以下「グランドデザイン答申」と略）を答申し日本の第三段階教育のグランドデザインを提起している。この答申は基調として、大学・短大・高等専門学校・専門学校の各学校種が、また個々の機関が、それぞれに「多様性と柔軟性」を発揮することを求めている。ただし舵取りのない多様性についてはOECD編（2009）からの批判もあり、今回のグランドデザインがそれに十分に込めるものになっているかどうか疑問もある。他方で、この教育の質保証とその国際的な通用性への考慮も強調され、またその標準化へのアプローチも示されている。

本稿でとりあげる学修成果についても、「グランドデザイン答申」では、「学士力」や日本学術会議の「分野別参照基準」がその取組の参照モデルとして提示されている。

しかしながら、短期大学が設定すべき学修成果目標は、4年制大学を念頭になされているそれらの議論がそのまま適用できるのかどうか、中央教育審議会（2018）ほか、第三段階教育の各学校種に関する検討の中でも十分な議論がなされていない。

到達すべき学修成果目標が4年制大学と短期大学とで同じなのであれば、短期大学の効率的な教育に対して4年制大学が冗長なものであると判断せざるを得ない。あるいは短期大学が無理に高い目標を設定している懸念も生じる。他方で4年制大学と目指す方向性は同じだが学習期間が半分という教育年数に応じたレベルの目標を到達すると考えられているとすれば、それは「2分の1大学」というかつての狭い短期大学理解に留まるものと言わざるを得ない。

これまでの「研究会」の探究結果として、短期大学は地域や職業の現場との繋がりをもって教育研究を行う機関であり、特に地方地域にある短期大学の固有性は、「研究会」のボトムアップによるスタンダード構築への検討結果から明らかになっている。この点を、学修成果のスタンダードとし反映させ、編纂していくことが有効である。

2.3 国際通用性をもつ学修成果レベルとタキノミー

21世紀に入り世界150カ国以上が、国内の教育と学位・資格制度の学修成果について標準化と国際通用性向上を目指し、国家学位資格枠組（National Qualifications Framework、以下 NQF と略）を開発導入している（吉本 2020 b）。NQF は、あらゆる教育制度や学位・資格を、その国固有の学修成果の次元分類（タキノミー）にもとづいて記述する制度枠組みである。それは、多くの場合「タテのレベル」と「ヨコのタキノミー」によって記述されたマトリクスとして表現されている。

日本においても、高校教育段階までは、到達すべき学修成果ないし修得すべきコンピテンシーが学校教育法において規定され、また学習指導要領によってその成果到達のための教育と学習の方法論が規定されている（吉本ほか 2020）。しかし、短期大学や大学など第三段階教育については、法制度上での教育の目的は、その専門的な分化の程度にもかかわらず、あるいはそうした専門的分化のゆえに明確に規定されていない（表1参照）。

学修成果による教育の質保証を課題として、「グランドデザイン答申」が、日本学術会議の分野別の参照基準を活用しようとするのはそうした背景の故である。しかしながら、「保育・幼児教育」などの短期大学や専門学校の専門

分野について日本学術会議はほとんど考慮していないため、本稿のような、短大などの教育現場からのマクロな視野を持ったボトムアップアプローチが必要となるのである。

表1のように、日本の学校教育制度の法規上の用語を調べてみても、国際的な NQF との通用可能性を考慮して、学修成果として「知識」「技能」「態度」「職業現場の文脈における知識・技能・態度の応用」の4次元の分類（タキノミー）を用いることができることがわかる（吉本 2020 a：68頁）。

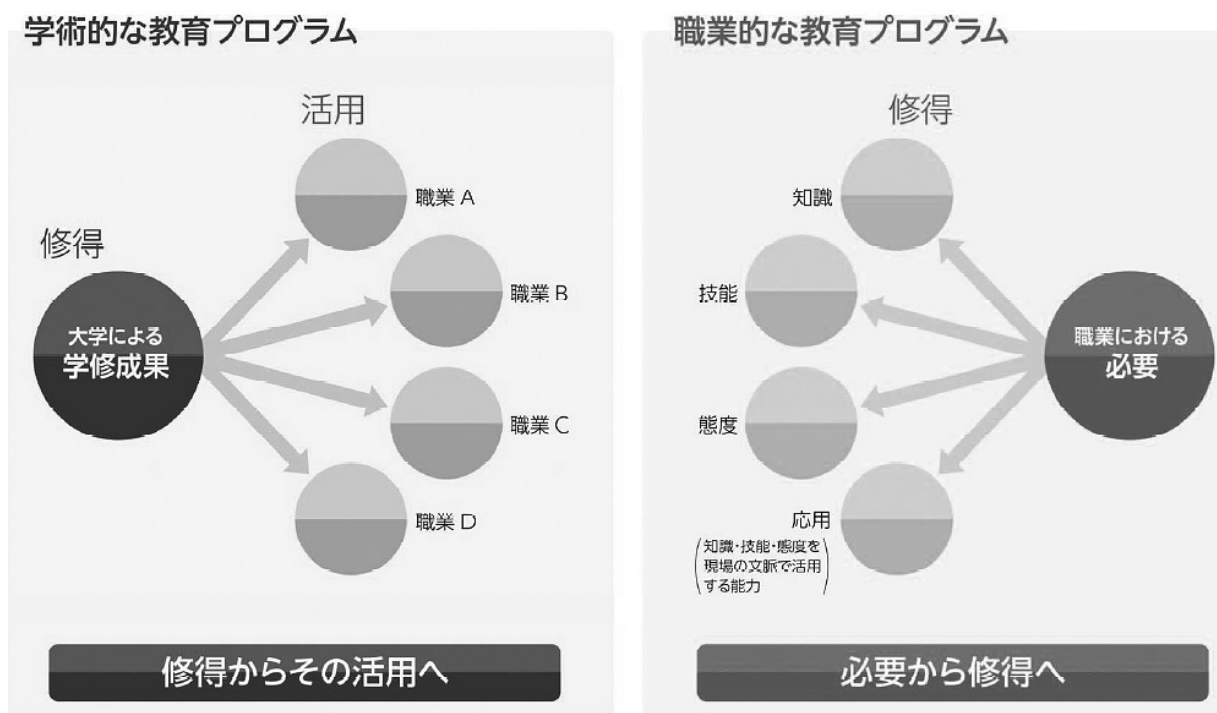
すなわち、高校までの学校教育段階においては、学校教育法において教育の目標が「知識」「技能」「態度」ならびに「応用」の用語で明確に規定され、また対応して学習指導要領、教育要領がその学習と教育の方法の基準を規定している。

他方で、第三段階教育においては、学問の自由と大学の自治の考え方から、学校教育法においては教育の目的規定として大学では「知的、道徳的および応用的能力の展開」に留まり、学修目標は学校教育法上で定められていない。そのため、中教審においてガイドラインとして知識、技能、態度およびその応用能力を定めた「学士力」を提示している。ここでは、歴史的に形成されてきた教育研究の統合などの学術的な省察を教育アプローチが規範となるため、専

表1 学校教育法における教育の目的・目標と大学における学士力・分野別参照基準

		知識	技能	態度	応用	目的：育成・展開させる資質
小学校	学校教育法第30条2項	基礎的な知識	基礎的な技能	主体的に学習に取り組む態度	これら（知識と技能）を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力	⇒ 生涯にわたり学習する基盤を培う
中学校	第49条（第30条2項を準用）					
高等学校	第51条	一般的な教養を高め、専門的な知識を習得	専門的な技術及び技能を習得	個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度	義務教育として行われる普通教育の成果を更に発展拡充させて、豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質	⇒ 義務教育として行われる普通教育の成果を更に発展拡充させて、豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと。
大学	学士力および学校教育法第83条	知識・理解 （専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する）	汎用的技能 ①コミュニケーション・スキル ②数量的スキル ③情報リテラシー ④論理的思考力 ⑤問題解決力	態度・志向性 ①自己管理能力 ②チームワーク、リーダーシップ ③倫理観 ④市民としての社会的責任 ⑤生涯学習力	統合的な学習経験と創造的思考力（これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力）	⇒ 知的、道徳的、及び応用的能力を展開させる
	分野別参照基準	分野の学びを通じて獲得される基本的な「知識と理解」	分野に固有の知的訓練を通じて獲得される「ジェネリックスキル」		基本的な知識と理解を活用して発揮される「能力」	⇒

資料出所：吉本（2020a）表4-1、68頁より一部修正



資料出所：吉本（2020b）図1、7頁

図1 学術教育と職業教育の2つのアプローチ

門的職業養成についてもその学術モデルが強調されている。ただし、専門分野ごとの多様性を考慮しながら、日本学術会議がボランティアな基準として、学術関係者の範囲での「分野別参照基準」を提示しているのである。

しかしながら、高校までの標準化プログラムと大学の多様性との間隙にある短期大学や専門学校においては、その教育段階に相応しい学修成果のモデルが提示されていない。それは、この段階の教育プログラムは、国際的にも職業や实际生活に関わる、広範囲に専門の分化した教育プログラムが展開されているためである。

2.4 学修成果とコンピテンシーにかかる専門分野別取組

学術型の省察と批判的理解を基本とする大学教育の枠組みを含みつつも、テクニシャンレベルの職業人の養成という課題を追究する短期大学と専門学校のプログラムについては、学修成果の設定のベクトルの違いを考慮しておく必要がある。すなわち、図1に示すように、大学等の学術型教育のプログラムにおいては、そのプログラムの基礎となっている学問分野の知識、技能などを体系的に修得し、それをさまざまな方向の進路、職業において活用する、つまり「修得」から「活用」へという考え方をとる。これに対して、職業人の養成においては具体的職業人に必要とさ

れるコンピテンシーを各タキソミーに分解し、その修得を目指すプログラムとなる。つまり、後者は「必要」から「修得」という考え方となるのである（吉本 2020b：7頁）。

また、繰り返しになるが、短期大学においては、大学の目的にかえて「職業または实际生活のための能力」を養成する機関として、「学士力」と同じ学修成果を追求していると考えられることにも一定の意味がある。ただし、同じ学修成果を探究し、かつ実証的に把握可能な学修成果のレベルであれば、前述したとおり、短期大学が到達困難な目標を掲げているのか、大学が容易に達成できる目標に留めているのかどちらかとなる。

少なくとも、諸外国のNQFをみると、学士レベルとそれ以下の準学士レベルの、教育年数の異なる教育プログラムを、同じ学修成果の記述語で規定している事例はみられない。学修成果を基にした国際通用性を検討するためには、それぞれの学修成果のレベルを適切に識別していく必要がある。

吉本編（2020）では、図2のように適切なレベル区分をもち、「知識」「技能」「態度」「知識技能態度の現場の文脈での応用」の4次元のタキソミーにおいて、レベル3の高校卒業からレベル7の修士課程までの学修成果ないし

【教育】 学位・資格のレベル	学修成果／職業コンピテンシー				【職業】 各レベルの目標 となる職業的役割
	知識	技能	態度	現場の文脈における知識・技能・態度の応用	
8 博士または同等以上	〇〇〇〇	〇〇〇〇	△△△△ 〇〇〇〇	△△△△ 〇〇〇〇	□□□□
7 修士または専門職学位	〇〇〇〇	〇〇〇〇	△△△△ 〇〇〇〇	△△△△ 〇〇〇〇	□□□□
6 学士または高度専門	〇〇〇〇	〇〇〇〇	△△△△ 〇〇〇〇	△△△△ 〇〇〇〇	□□□□
5 短期大学士、準学士または専門士	〇〇〇〇	〇〇〇〇	△△△△ 〇〇〇〇	△△△△ 〇〇〇〇	□□□□
4 専門学校1年課程または高校専攻科	〇〇〇〇	〇〇〇〇	△△△△ 〇〇〇〇	△△△△ 〇〇〇〇	□□□□
3 高校卒、専修学校高等課程3年修了、または高専3年までの単位修得	〇〇〇〇	〇〇〇〇	△△△△ 〇〇〇〇	△△△△ 〇〇〇〇	□□□□

資料出所：吉本（2020a）、図4-1、69頁を一部修正

図2 学修成果・コンピテンシーと学位・資格レベルとのマトリクス

コンピテンシーをマトリクスに配置したテンプレートをもとにして、7つの専門分野（コメディカル、食調理、IT、デザイン、ビジネス、観光）におけるその適用モデルを、それぞれ関係する産官学関係者とともに検討し策定している。

3. 課題の設定と方法

本稿では、吉本編（2020）の7つの専門分野を横断するタキソノミー開発を参考にし、職業人養成型のプログラムと学術型のプログラムを対比しながら、各校の教育課程の「学位授与の方針」（ディプロマポリシー、以下でDPと略）の位置づけについて調査し、対象となるテキストの選別・取扱いについて検討することとした。

私立短期大学における教育課程のDPは、私学の特徴として建学の精神・理念や目的に基づいて構築されており、短期大学によって機関レベルのDPや到達目標が置かれている。分析の際は、公表されているDPの文言から、「建学の精神に基づいて」「理念に基づいて」といった、上位の要件が含まれる箇所をテキストから除外して分析を行った。対象テキストは、各校が2019年度に情報公開したテキストを使用した。

教育課程のDPに書き添えられる学修成果目標については、「到達目標」や「教育目標」、あるいは「主要科目の到達目標」の設定がある短期大学と、そうでない短期大学が

ある。学修成果目標が書き添えられていない短期大学の場合には、教育課程のDPと各教科目（シラバス）の成果指標等が直接接続している。本稿では、シラバスに置かれる成果指標等については分析に含めないものとした。

専門的職業人養成にかかる保育系の対象は、いずれも保育士と幼稚園教諭二種免許の養成を共通とするものとして、香蘭女子短期大学保育学科、九州龍谷短期大学保育学科、長崎短期大学保育学科保育専攻、長崎女子短期大学幼児教育学科、西九州大学短期大学部幼児保育学科、佐賀女子短期大学子ども未来学科子ども保育コース、精華女子短期大学幼児保育学科、以上7つの教育課程を対象に分析を行った。

専門的職業人養成に特化しない領域としての総合ビジネス系については、人文、服飾や製菓等の家政、福祉系を除く教育課程を対象とする。本稿での分析対象は、香蘭女子短期大学ライフプランニング総合学科、長崎短期大学国際コミュニケーション学科、長崎女子短期大学生生活創造学科ビジネス・医療秘書コース、西九州大学短期大学部地域生活支援学科多文化コース、佐賀女子短期大学地域みらい学科グローバル共生ITコース、精華女子短期大学生生活科学科生活総合ビジネス専攻、以上6つの教育課程を対象に分析を行った。なお以下では、短期大学と短期大学部の名称用語を「短大」として略記する。

テキストマイニングにはRMeCab-0.996パッケージ

(オープンソース 形態素解析エンジン)¹⁾を使用した。テキスト間の類似・相違性を見出すために、単語の頻出、主成分分析及びクラスター分析、Nグラムの分析を行った。テキスト分析に際しては、名詞と動詞に単語を絞り、多用されていた「～性」「～的」「～力」「～感」その他固有の用語等について、ユーザー辞書を作成し、一つの単語とみなして分析を行った。成分分析での重み付けには、局所的重みとして牽引語頻度 (tf)、大域的重みとして文書頻度の逆数 (idf)、正規化についてコサイン正規化 (norm) を採用した。

4. 保育系の学修成果とその共通項について

4.1 用語の頻度と関連の分析

各テキストの単語（トークン）の頻出数を調べた結果、九州龍谷短大172、香蘭女子短大104、長崎短大149、長崎女子短大160、西九州大学短大1564、佐賀女子短大399、精華女子短大71であった。その抽出された単語数には短大ごとに20倍以上の開きがあり、短大ごとの考え方の違いが見られるが、単語（トークン）の関係性や構造を把握するためにこうした開きが特に問題になるとは考えられないので、このトークンを用いて以下分析を進める。

それらのテキスト中には固有の単語もあるが、例えば「積極的に～」と「積極性をもって～」、「主体的に～」と「自ら～」、「専門知識」と「専門的知識」など、ほぼ同じ意味を持つが、文体表現が異なる文章が散見された。成分分析（重み付けあり）からは共通する1つの単語群の塊が示されることから、固有の単語以外は、概ね同じ内容を指しているものと考えられる。このことは、総合系でも同じであった。そこで、保育系のDPと書き添えられる学修目標をもとに、単語の使用頻度による主成分分析並びにクラスター分析を行った。

まず、主成分分析（重み付けなし）から各テキストの特徴を調べた結果、ほぼ一つの単語群の塊として頻出しており、概ねテキスト全てが類似共通しているものと判断された。最も使用頻度が高かった「する」（合計の頻度127）と「できる」（104）、そして「保育」（36）、「知識」（27）、「技能」（21）の5単語は、比較的高い頻度で共通して使用されていた。この他に使用頻度が高かったものとして、「こと・理解・子ども・社会・保育者・身」などが挙げられる。各テキストの単語頻出は、九州龍谷短大「保育者・

こと・なる・よう・理解・身」、香蘭女子短大「持つ・感性・心・保育者・必要・力」、長崎短大「専門的・身・つける・いる・力・理解」、長崎女子短大「保育者・こと・子ども・行う・社会・関わる」、西九州大学短大「こと・理解・子ども・社会・身・つける」、佐賀女子短大「人・子ども・社会・地域・専門的・保育者」、精華女子短大「人・こと・いる・様々」などの頻度が高かった。それぞれの単語の出現頻度の特徴としては、九州龍谷短大は「保育者」や「(できる)よう(になる)」、香蘭女子短大は「感性」、長崎女子短大及び西九州大学短大は、「理解」や「(する)こと(ができる)」、精華女子短大・佐賀女子短大・長崎女子短大は「専門的」や「人」が頻出していることが分かった。成分分析（重み付けなし）に基づき、クラスター分析を行った結果、ミンコフスキー距離、完全連結法（最長距離法）により、およそ主成分分析の結果に相当する一つのクラスターに統合された。測定距離の方法により、これ以外のクラスターが複数示されており、テキスト間の距離は近いことが考えられるが、その中で九州龍谷短大と香蘭女子短大は、それぞれ「保育者」と「感性」を特徴とする、(総合的な)人物の全体像を示す方向で、長崎短大～西九州大学短大は、「専門的」能力～要素の具体的内容に対する「理解」を特徴として、成果の具体性を示す方向で示されていると考えられた（図表の掲載は割愛する。）。

主成分分析（重み付けあり）の結果（図3）からは、単語の出現傾向に違いはあるものの、概ね中央の単語群の塊

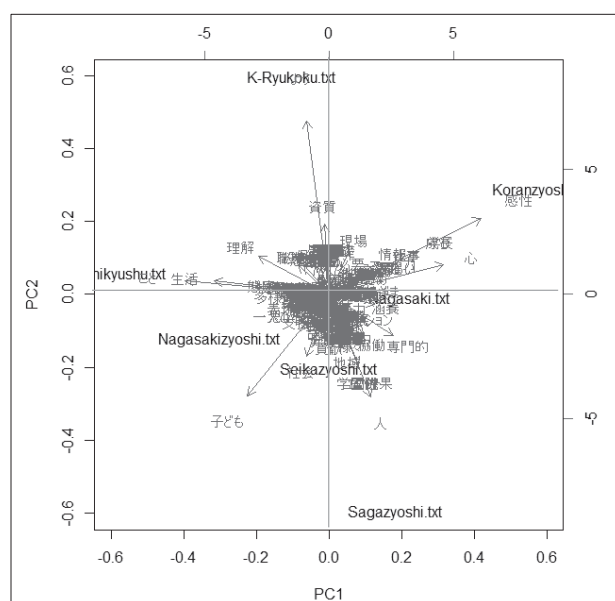


図3 (保育系) 単語の使用頻度による主成分分析

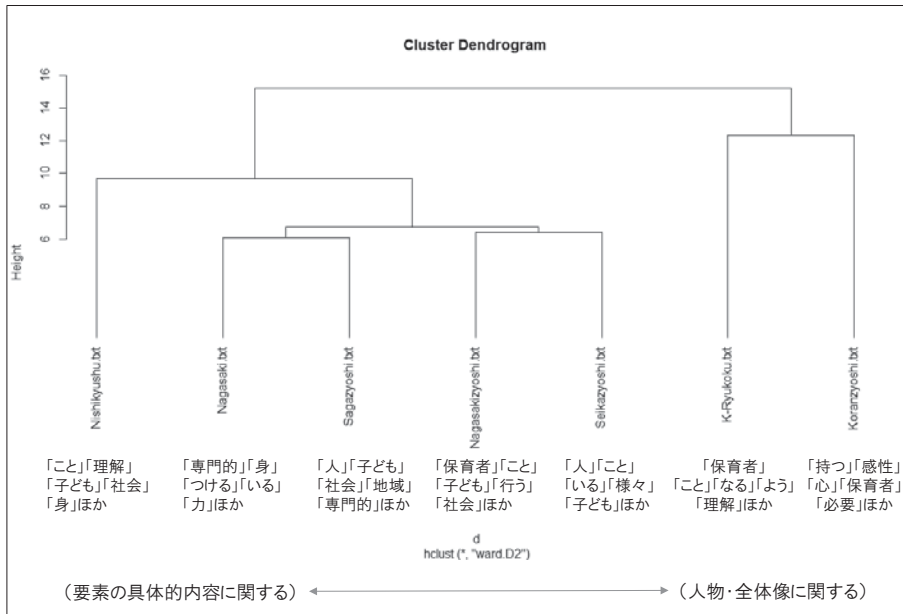


図4 (保育系) 単語の使用頻度によるクラスター分析

として頻出しており、重み付けなしの分析と同様に、各テキストが全く異なるものではないことが分かった。このクラスター分析の結果(図4)からは、高い類似性が示された。またテキスト間の距離が近いために、様々な系統区分が示された。これらの結果は、重み付けなしの分析と同様に、それぞれテキストが全体像～能力要素の枠組みの範囲において、構成されていることが分かった。

参考として、文体比較として、Nグラム(単語の連なり)の主成分分析(重み付けなし)を行った。その結果、文体

に大きな違いはないと考えられるが、比べて言えば佐賀女子短大・香蘭女子短大・長崎短大は、その他と比較して、それぞれ固有の文体特徴を有していることが分かった。

バイグラム(頻出3以上)によるネットワーク分析を行った。この際、名詞・動詞のみを対象とし、動詞_非自立及び「こと→できる」の頻出数(出現数31)以上を除外した。その結果、図5に示す語群から、次の語群グループが得られた。「求められる。関心を持つ。汎用的能力・コミュニケー

ションの能力。情報収集。地域・国際社会の一員。専門的知識の理解と獲得、技能の修得。認識を深める。貢献できる。子どもの成長と発達の段階。保育現場での展開。動的要素²⁾(展開・活用・発見・支援・協調・獲得・課題解決・処理・対応・行動・理解・修得)。「実線の矢印は、単語の繋がりと頻度を太さで表している。これらのうち、次の3つのグループについては、テキストから単語の接続を検索したところ、破線の矢印の繋がりが示された。「関心→持つ」は「子ども」(→)から、「求める→られる」は「保

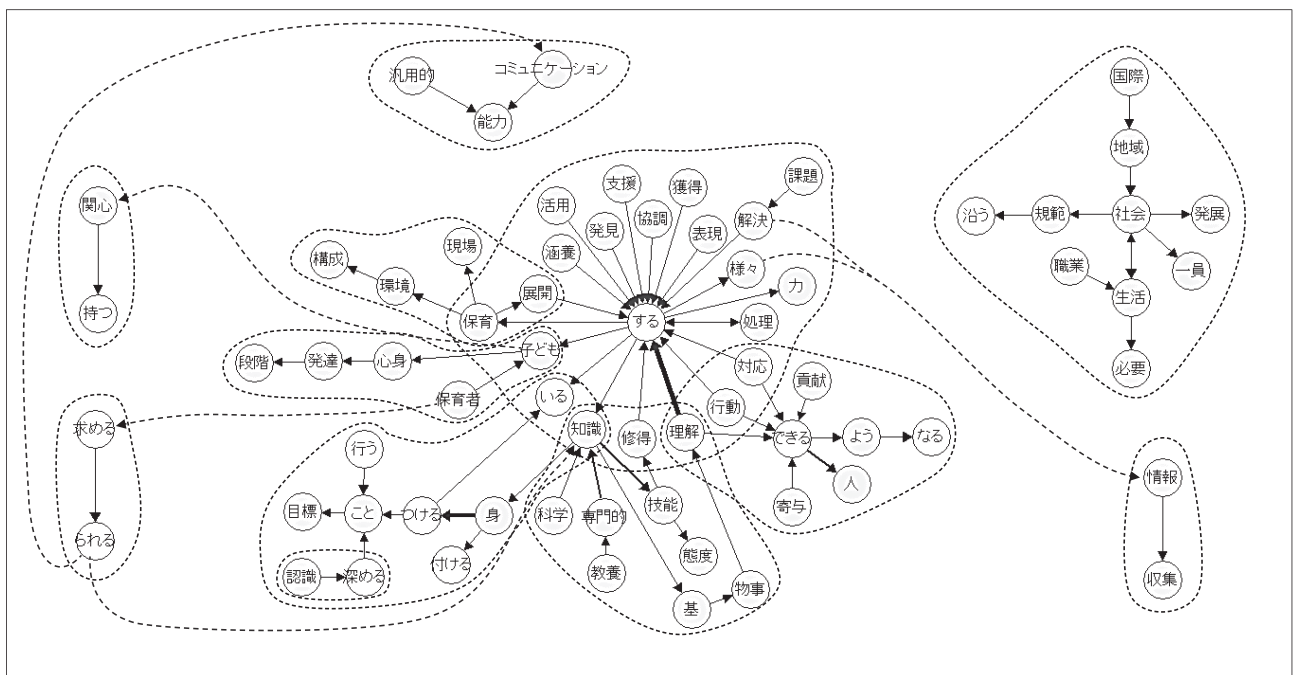


図5 (保育系) Nグラムによるネットワークグラフ

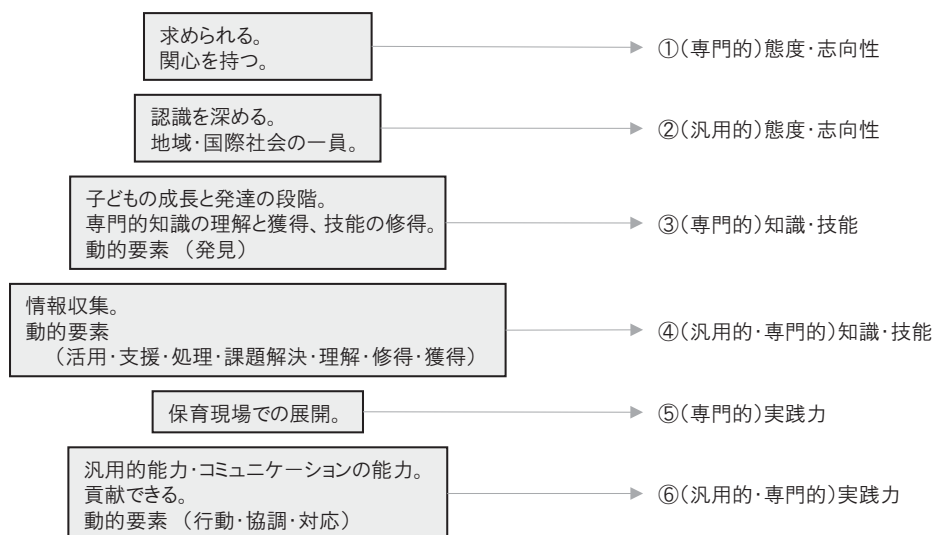


図6 (保育系) コンピテンシー概念に基づく成果指標の分類

育者」(→) から (→)「知識、技能、コミュニケーション能力、人間関係」へ、そして「情報→収集」は「様々、解決」(→) から繋がるものであった。

ネットワークグラフのグループについて、広義のコンピテンシー概念³⁾に基づいて分類を検討した。その結果、図6の枠組みに類別されるものと考えられた。これらの分類は、大きく3つの能力(態度・志向性、知識・技能、実践力)に区別でき、およそそれぞれに専門・汎用的要素に区別されているものと理解できる。

4.2 学修成果のスタンダードの試行的策定

図5と図6の分析・分類に基づき、保育系の学修成果のスタンダードとして、国際的通用性を持つタキノミーを

表2 保育系分野の短期大学教育プログラムの学修成果 JCKK スタンダード ver. 1

知識	①「保育者として必要な専門知識と技能を身につけている。」
	②「子どもの成長と発達の段階を理解している。」
	③「幅広い知識を備えている。」
技能	④「社会人・保育者として、物事に対して情報の収集にあたり、理解・処理することができる。」
	⑤「社会人・保育者として、対象者への適切な支援や、見出した課題の解決にあたることことができる。」
態度	⑥「保育者として求められる理想像と子どもへの関心を持ち続けている。」
	⑦「様々な人との関わりのなかで、自分の役割への認識を高めていくことを目指している。」
応用	⑧「社会人・保育者として、適切なコミュニケーションをもって対応ができ、協調した行動をもって、保育に貢献できる。」
	⑨「現場での、環境の構成を整え、保育を適切に展開できる。」
	⑩「保育での新たな発見を見出していける。」

考慮し、「知識」「技能」「態度」「現場の文脈における知識・技能・態度の応用」の4次元のタキノミーを用いて、表2のように、10項目に再編集することができる。

4.3 考察

各短大が設定する教育課程のDP及び学修目標は、上記の事項が大なり小なりの共通要素として含まれ、文章の表現を含めて各校の教育の特色等が盛り込

まれて形作られているものとする。上記10項目について、JCKK加盟校の併設大学が設置する保育系(西九州大学子ども学部子ども学科)教育課程のDP及び学修目標との比較を俯瞰したところ、当該短大では、(教育・保育)専門的・応用的知識及び技術の修得、心理学や福祉学等の子どもに関する学際的、総合的知識の修得という点が異なっていた。表記される各能力要素の知識レベル(学びの深さ)については、シラバスの成果指標やカリキュラムポリシーを含めた分析が必要と考える。これ以外の要件は、双方に共通する基盤的な能力要素と考えられる。

4.4 保育分野の学修成果 JCKK スタンダードと個別短大の学修成果の合致度

表2の4次元に分類された10項目の保育分野の学修成果 JCKK スタンダードと、分析対象である各短期大学の学修成果との合致度について検討する。JCKK スタンダードが、各短大の学修成果をどの程度包摂しているのか、また、JCKK スタンダードの項目からは外れる、短大独自の学修成果が設定されているのかについての検証を試みる。

表3 保育系分野の短期大学教育プログラムの学修成果
JCKKスタンダードとN短大比較

知識	JCKKスタンダード	①保育者として必要な専門知識と技能を身につけている。 ②子どもの成長と発達の段階を理解している。 ③幅広い知識を備えている。
	N短大	Ⅱ保育に関する専門的知識・技能を修得し、体系的な理解が出来る。 (基礎教養・保育の本質・保育の対象・保育の内容方法・保育実践に関する知識技能の修得)
技能	JCKKスタンダード	④社会人・保育者として、物事に対して情報の収集にあたり、理解・処理することができる。 ⑤社会人・保育者として、対象者への適切な支援や見出した課題の解決にあたることができる
	N短大	Ⅲ保育の対象を理解し、保育にかかわる様々な人々と協働する力を身につけている。 (状況把握力・発信力・傾聴力・協働する力)
態度	JCKKスタンダード	⑥保育者として求められる理想像と子どもへの関心を持ち続けている。 ⑦様々な人との関わりのなかで、自分の役割への認識を高めていくことを目指している。
	N短大	I人間性と品格を備えた社会人として行動できる (主体性・自律性・親和性) V自己の課題を探究し、地域の保育の発展と向上のために学び続ける力を身につけている (自己創出力・行動持続力)
応用	JCKKスタンダード	⑨現場での、環境の構成を整え、保育を適切に展開できる。 ⑩保育での新たな発見を見出していける。
	N短大	Ⅳ保育に関する専門的知識・技能を応用し、様々な課題を解決する保育実践力を身につけている (情報収集力・情報分析力・計画立案力・計画実践力)

4.4.1 N短大(長崎短大保育学科)の学修成果との比較

表3は、表2の保育分野の学修成果JCKKスタンダード4次元分類表に従って、N短大の5つの学修成果(ディプロマ・ポリシー/人材養成の到達目標)を振り分けたものである。

N短大の学修成果には、それを達成するためのベンチマークを2～5項目設定し、各々に、4レベルのルーブリックを設けている。学修成果の下の()は、ベンチマーク項目である。

表3で示すように、N短大の5つの学修成果はすべて、JCKKスタンダード4次元分類表に当てはめることができた。例えば、「知識」に係る3項目のJCKKスタンダードの学修成果を、N短大では「保育に関する専門的知識・技能を修得し、体系的な理解ができる」と1項目にまとめ、それを達成するための5つの具体的な学習内容をベンチマークとして設定するという構造になっているが、学修成果と

しての内容は同質であると言える。以下、「技能」「態度」「応用」についても同様である。

4.4.2 S女子短大(佐賀女子短大こども未来学科こども保育コース)の学修成果との比較

表4は、保育分野の学修成果JCKKスタンダード4次元分類表(表2)に従って、S女子短大の学修成果(ディプロマ・ポリシー/評価基準)を振り分けたものである。

S女子短大の学修成果は、ディプロマ・ポリシーと、それに基づいて、学習成果の評価を明確にするために定められた「評価基準」という形で示されている。各コースのディプロマ・ポリシーは全学的なポリシーを最初に掲げて2つ目以降に専門分野のポリシーを3～5設定、これに基づいた「評価基準」が各々2～5項目定められ

ており、各項目に5レベルのルーブリックを設けている。

S女子短大では、JCKKスタンダードの4次元分類における知識・技能と応用の一部を、「保育者としての専門的知識や実践的技能を修得し、様々な側面から子どもを理解し、国際・地域社会における今日的なニーズに対応できる」という形でひとくくりにカテゴライズしている。それに加えて、「保育者としての使命感と豊かな人間性」「子どもに寄り添い」「子どもを尊重することができる」といった保育者としての態度と、どちらかといえば汎用性の高い「保育者として求められるコミュニケーション能力と人間関係を調整する能力」と、3つのカテゴリーでディプロマ・ポリシーを構成している。

この3つのカテゴリーの下に設定されている9項目の「評価基準」がいわゆる学修成果にあたる。その内容はJCKKスタンダードの10項目でほぼカバーされていると考えられるが、一つだけ注意しておきたいのは、S女子短大で頻出する「実践」という語彙がJCKKスタンダードに

表4 保育系分野の短期大学教育プログラムの学修成果
JCKKスタンダードとS女子短大との比較

知識	JCKK スタンダード	①保育者として必要な専門知識と技能を身につけている。 ②子供の成長と発達と段階を理解している。 ③幅広い知識を備えている。
技能	JCKK スタンダード	④社会人・保育者として、物事に対して情報の収集にあたり、理解・処置することができる。 ⑤社会人・保育者として、対象者への適切な支援や、見出した課題の解決にあたることができる。
知識 技能 応用	S女子 短大	〈ディプロマ・ポリシー〉 3. 保育者としての専門的知識や実践的技能を修得し、様々な側面から子どもを理解し、国際・地域社会における今日的なニーズに対応できる人
		〈評価基準〉 ⑦保育内容についての専門知識を持っている ⑧遊びや生活の援助などの実践に必要な能力を身につけている ⑨子どもを理解するための知識と実践的な能力を身につけている ⑩特別支援教育や子育て支援などの現代的教育・保育ニーズの理解と実践ができる
態度	JCKK スタンダード	⑥保育者として求められる理想像と子どもへの関心を持ち続けている。 ⑦様々な人との関わりのなかで、自分の役割への認識を高めていくことを目指している。
	S女子 短大	〈ディプロマ・ポリシー〉 2. 保育者としての使命感と豊かな人間性を持ち、常に子どもに寄り添い、子どもを尊重することができる人 〈評価基準〉 ④子どもに対する深い愛情と保育者としての使命感を持っている ⑤豊かな感性を持って常に子どもの心に寄り添い、共感することができる ⑥子どもの権利を理解し、尊重する姿勢を有している
応用	JCKK スタンダード	⑧社会人・保育者として、適切なコミュニケーションをもって対応ができ、協調した行動をもって、保育に貢献できる。 ⑨現場での、環境の構成を整え、保育を適切に展開できる。 ⑩保育での新たな発見を見出していける。
	S女子 短大	〈ディプロマ・ポリシー〉 4. 保育者として求められるコミュニケーション能力と人間関係を調整する能力を身につけている人 〈評価基準〉 ⑪適切に自己を表現し、他者の意見を傾聴することができるコミュニケーション能力を身につけている ⑫子どもや他の保育者と良好な人間関係を築くことができる (⑧遊びや生活の援助などの実践に必要な能力を身につけている、⑨子どもを理解するための知識と実践的な能力を身につけている、⑩特別支援教育や子育て支援などの現代的教育・保育ニーズの理解と実践ができる)

は使用されていないことである。S女子短大の「評価基準」では、知識・技能・応用を一つのカテゴリーにまとめていることも影響してか、「知識」「理解」「実践」「能力」といったコンピテンシーにかかわる単語がうまく整理されないままに使用されている憾みもあるのだが、その一方で、JCKK

よいと考えられる。

しかしながら、学校教育法が大学設置の目的を「知的、道徳的及び応用的能力を展開させる」と定めているのに対し、新たに設置された専門職大学／短期大学設置の目的は同法で「職業を担うための実践的かつ応用的な能力を・展

スタンダードの「応用」のテーブルにある「⑩保育での新たな発見を見出していける」にあたる表現はS女子短大の「評価基準」には見いだせない。図6「広義のコンピテンシー概念に基づく分類」の⑤⑥に「(専門的・汎用的)実践力」とあり、これがJCKKの4次元分類では「応用」としてカテゴライズされている。また、表3のN短大の「応用」のテーブルに「…知識・技術を応用、様々な課題を解決する保育実践力を身につけている」とあり、ここでは、知識・技術を「応用」して課題を解決する力が「実践」力だとされている。このように、「実践」と「応用」が近い関係にあるのは確かだが、両者の関係をもう少しだけ整理しておこう。

「実践」という行為を少し具体的に想像すると、卒業生が短大で学んだ知識や技術を保育園で使用して働いている時に、自分が想定していなかった状況が発生し、その状況を乗り切るために、手持ちの知識や技術を加工・工夫してそれに対応する、というようなことになるのだろうが、それはまさに「発見」であり「応用」であろう。そのような意味で「実践」とは、N短大の学修成果に見えたとおり、「発見」や「応用」を内包するやや広い概念であり、両者の内容はある程度同質とひとまずは言って

開させる／育成する」とされており、「実践」と「応用」は明確に差別化して使用されている。その一方、周知のとおり第百八条短期大学設置の目的は「職業又は实际生活に必要な能力を育成する」とされており、そこに「実践」「応用」いずれの語も使用されていないことには、短期大学における学修成果のスタンダード作成を目指すにあたり、注意しておく必要がある。西九州大学短期大学部の学修成果の部分でも指摘のあった「応用的」「学際的」「総合的」といった語の使用の在り方なども併せ、こうしたスタンダードを各短大に適用し検証していく方向での今後の議論の深化が期待される場所である。

5. 総合系の学修成果とその共通項について

5.1 用語の頻度と関連の分析

次に専門職業人養成に特化していない総合系の学修成果を検討する。単語の頻出数を調べた結果、香蘭女子短大158、長崎短大89、長崎女子短大160、西九州大学短大1594、佐賀女子短大326、精華女子短大90であった。テキスト中には固有の単語もあるが、保育系のテキストと同様に、ほぼ同じ意味を持つが、表現が異なる文章が散見された。次の分析で述べるように、成分分析からはほぼ共通する1つの単語群が示されていることから、固有の単語以外は、概ね同じ内容を指しているものと考えられる。総合系のDP及びこれに書き添えられる学修目標をもとに、単語の使用頻度による主成分分析並びにクラスター分析を行った。

主成分分析（重み付けなし）の結果、ほぼ中央の単語群の塊として頻出しており、概ねテキストが共通しているものと判断される。それぞれの単語の出現頻度の特徴としては、「する」「できる」「技能」「知識」が共通する単語としてあるほか、各校の図中の単語が揚げられる。

最も使用頻度が高かった「する」（合計の頻度119）と「できる」（101）、そして「知識」（28）、「技能」（20）の4単語は、比較的高い頻度で共通して使用されて

いた。この他に使用頻度が高かったものとして、「こと・社会・地域・理解・いる・文化」などが挙げられる。各テキストでは、香蘭女子短大「多様・地域・理解・いる・豊か・自ら」、長崎短大「力・コミュニケーション・こと・専門的・能力・キャリアデザイン」、長崎女子短大「こと・ビジネス・医療・職場・秘書・持つ」、西九州大学短大「こと・社会・理解・文化・つける・いる」、佐賀女子短大「人・社会・地域・専門的・持つ・未来」、精華女子短大「いる・人・社会・つける」の単語の使用頻度が高かった。主成分分析に基づき、クラスター分析を行った結果、最大

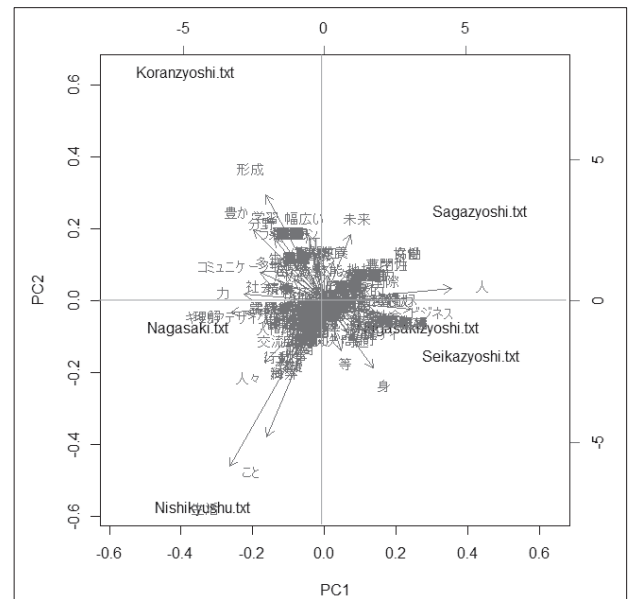


図7 (総合系) 単語の使用頻度による主成分分析

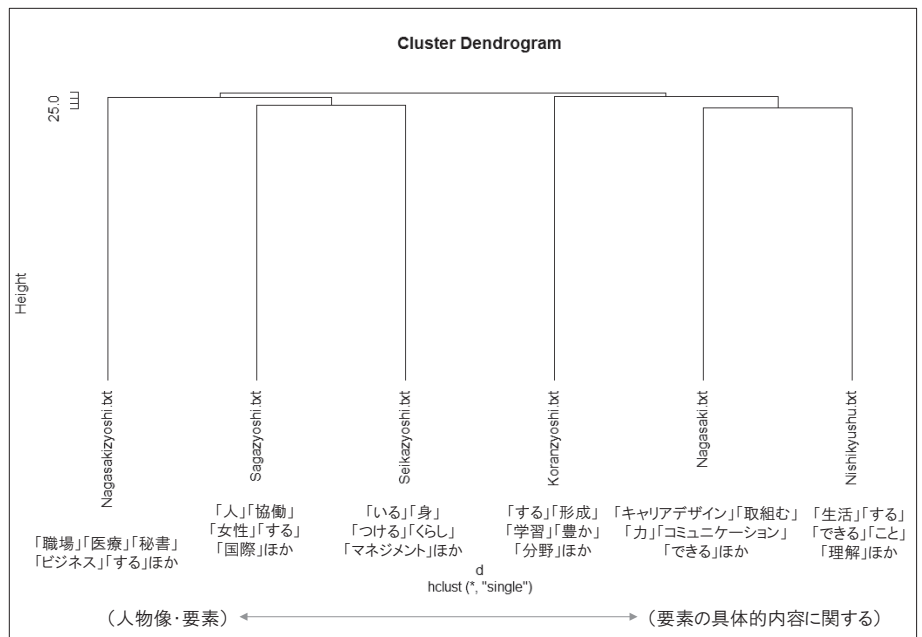


図8 (総合系) 単語の使用頻度によるクラスター分析

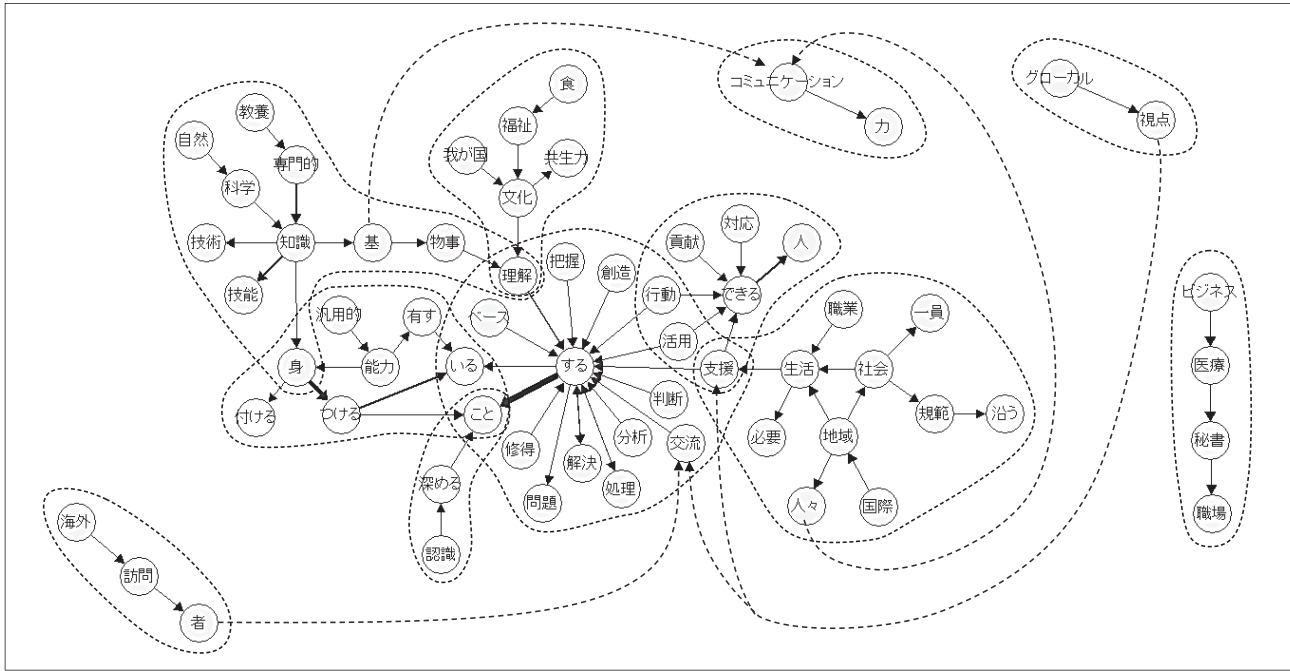


図9 (総合系) Nグラムによるネットワークグラフ

距離、完全連結法（最長距離法）により、およそ主成分分析の結果に相当する一つのクラスターに統合された。総合系のクラスターは、保育系と比較して、テキスト間の拡がりは大きいですが、距離は近接している。測定距離の方法により、これ以外のクラスターが複数示されており、テキスト間の距離は近いことが考えられる。テキストの特徴としては、全体像の要素を示す方向と、要素の具体性を示す方向で示されていると考えられた（図表は掲載を割愛する。）。

主成分分析（重み付けあり）（図7）に基づき、クラスター分析を行った結果（図8）、ミンコフスキー距離、単連結法（最小結合法）により、およそ主成分分析の結果に相当する一つのクラスターに統合された。それぞれの単語の出現頻度の特徴としては、重み付けなしの結果と同様に、全体像の要素～要素の具体的内容の範囲で文体がまとめられていると考えられるが、重み付けなしの分析も含め、クラスター間の距離は近く、大きな差異はないと考えられた。

参考として、文体比較としてNグラム（単語の連なり）の主成分分析（重み付けなし）を行った。

その結果、同心円状にそれぞれ固有の文体特徴を有していると考えられるが、概ね1つの単語の繋がり塊があって、重み付けした結果も考慮すれば大きな違いはないと考えられる（図表は掲載を割愛する。）。

バイグラム（頻出3以上）によるネットワーク分析を行った。この際、名詞・動詞のみを対象とし、動詞「非自立及び「こと→できる」の頻出フレーズ（出現数61以上）を除外した。その結果、図9に示す次の語群グループが得られた。{海外訪問者。コミュニケーション力。グローバル}な視点。ビジネス・職場。文化的理解。知識理解。認識を

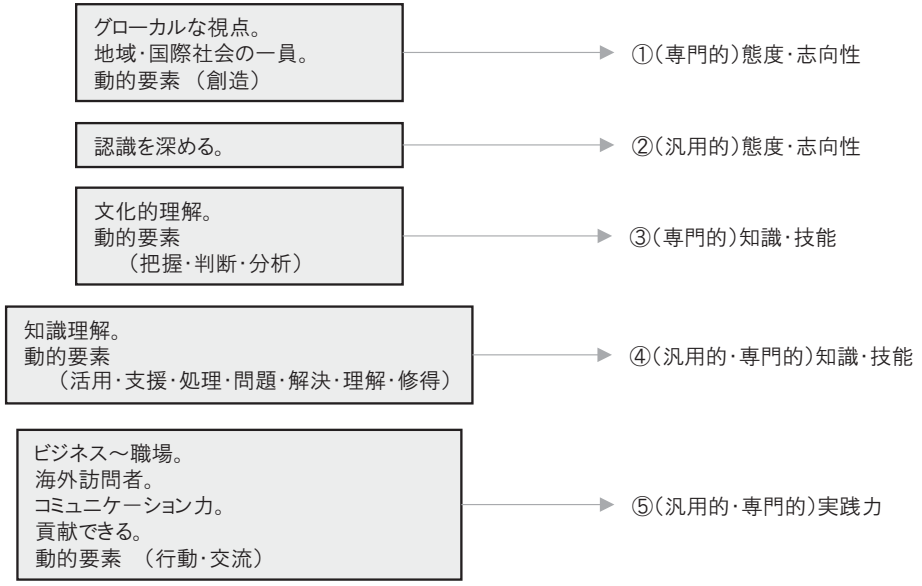


図10 (総合系) コンピテンシー概念に基づく成果指標の分類

深める。地域・国際社会の一員。貢献できる。動詞要素（把握・創造・行動・活用・支援・判断・交流・分析・処理・解決・問題・修得・理解）。これらのうち、次のグループについては、テキストから単語の接続を検索したところ、破線の矢印の繋がりが示された。「ベース」は「専門性、ホスピタリティとマネジメント」(→)から、「海外→訪問→者」は(→)「交流、文化を理解、おもてなし、会話、橋渡し、情報を得る」といった概して「交流」へ、「コミュニケーション→力」は「様々な人々、専門的知識(に基づく)」(→)から、「グローバル→視点」は(→)「交流、支援、活躍」へ、「ビジネス～職場」は(→)「接する、信頼(関係)、協力して活動、知識や技能の修得、応用、表現、価値を創造、行動、提案、努力、貢献」へ、広範囲に繋がっていることが分かった。「ビジネス～職場」間に置かれる「医療→秘書」は、テキスト固有のものであり、学修成果のスタンダードをまとめる際には除外した。「認識→深める」は「人間性、物事、文化、役割」(→)の、広範囲から繋がっていた。

ネットワークグラフのグループについて、広義のコンピテンシー概念に基づいて分類を検討した。その結果、図10の枠組みに類別されるものと考えられた。これらの分類は、大きく3つの能力(態度・志向性、知識・技能、実践力)に区別でき、およそそれぞれに専門・汎用的要素に区分されるものと理解できる。

5.2 学修成果のスタンダードの試行的策定

図9と図10の分析・分類に基づいて、総合系(非資格分野)の学修成果のスタンダードとし

表5 総合系分野の短期大学教育プログラムの学修成果 JCKK スタンダード ver. 1

知識	①「社会人・職業人として、幅広い知識をもっている。」
	②「様々な文化的背景を理解し、物事に対して分析、把握して自ら判断していきける。」
技能	③「社会人としての素養を備え、職業人として必要な情報スキルの基本を備えている。」
態度	④「グローバルな視点を備え、新しい価値の創造を志している。」
	⑤「様々な人との関わりのなかで、自分への認識を高めていくことを目指している。」
応用	⑥「職業人として、様々な人との交流ができ、行動をもって地域社会に貢献できる。」

て、国際的通用性を持つタキシノミーを考慮し、「知識」「技能」「態度」「現場の文脈における知識・技能・態度の応用」の4次元のタキシノミーを用いて、表5のように、6項目にまとめることができる。

5.3 総合系分野の学修成果 JCKK スタンダードと個別短大の学修成果の合致度

ここでは、保育分野と同様に、表5の4次元に分類された6項目の総合系分野の学修成果 JCKK スタンダードと、

表6 総合系分野の短期大学教育プログラムの学修成果 JCKK スタンダードとN短大の比較

知識	JCKK スタンダード	①社会人・職業人として幅広い知識をもっている ②さまざまな文化的背景を理解し、物事に対して分析・把握して自ら判断していきける
	N短大	II 確かな語学力をもち、情報機器の操作スキルと合せてプレゼンテーション等情報の発信ができる (読む力・書く力・話す力・聞く力・言語運用能力・ICT 運用能力)
技能	JCKK スタンダード	③社会人としての素養を備え、職業人として必要な情報スキルの基本を備えている
	N短大	III コミュニケーション力とグローバルな視点によって多様な人々と積極的に交流することができる (異文化理解と寛容性)
態度	JCKK スタンダード	④グローバルな視点を備え、新しい価値の創造を志している ⑤様々な人との関わりのなかで、自分の役割への認識を高めていくことを目指している
	N短大	I 人間性と品格を備えた社会人として行動できる (主体性・自律性・親和性) V 学修成果を活用し、キャリアデザインに取り組むことができる (自己理解・職業理解・ビジネスマナー・キャリアデザイン力)
応用	JCKK スタンダード	⑥職業人として、様々な人との交流ができ、行動をもって地域社会に貢献できる
	N短大	IV 専門的知識や技術を適切に用いて実践的な課題の解決に取り組むことができる (前に踏み出す力・考え抜く力・チームで働く力)

分析対象である各短期大学の学修成果との合致度について検討する。

5.3.1 N短大 (長崎短大 国際コミュニケーション学科) の学修成果との比較

表6は、表5の総合系分野の学修成果 JCKK スタンダード 4次元分類表に従って、N短大の5つの学修成果 (ディプロマ・ポリシー/人材養成の到達目標) を振り分けたものである。N短大の学修成果には、それを達成するためのベンチマークを2~5項目設定し、各々に、4レベルのルーブリックを設けている。学修成果の下の () は、ベンチマーク項目である。

表6で示すように、N短大の5つの学修成果はすべて、JCKK スタンダード 4次元分類表に当てはめることが出来た。ただ、N短大総合系の学修成果では、学科の特色を明らかにするために外国語の習得と運用力に関する到達目標については、ベンチマーク項目を細かく設定している。そのため、JCKK スタンダードが示す「知識」や「技能」の次元の学修成果は、やや、概略的であり、N短大の学修成果とは齟齬がある。

総合系分野に分類される、短大の学科・専攻・コースの教育目的、学修成果や、養成する人材像は、益々、多様化している。本稿の学修成果のスタンダード設定というタスクからも、「総合系」という一つの括りで分類することの難しさが示されている。

表7 総合系分野の短期大学教育プログラムの学修成果 JCKK スタンダードとS女子短大との比較

知識	JCKK スタンダード	①社会人・職業人として、幅広い知識を持っている。 ②様々な文化的背景を理解し、物事に対して分析、把握して自ら判断していける。
技能	JCKK スタンダード	③社会人としての素養を備え、職業人として必要な情報スキルの基本を備えている。
知識 技能 応用	S女子 短大	〈ディプロマ・ポリシー〉 3. 多文化共生力、専門的知識・技能 (外国語力、ビジネス能力、司書としての技能、IT とデザインに関わる専門的知識・技能) を国際・地域社会で主体的に活用できる人
		〈評価基準〉 ⑥多文化共生社会に対する基礎的な知識が身についている。 ⑦地域理解や職業理解について、基礎的な知識が身についている。 ⑧-1 「英語」や「国際国際交流」に関する専門分野の知識と技術が身についている。 ⑧-2 「司書」に関する専門分野の知識と技術が身についている。 ⑧-3 「IT デザイン」に関する専門分野の知識と技術が身についている。 ⑨インターンシップや実習等を通じて、職業に対する知識や理解を深めている。
態度	JCKK スタンダード	④グローバルな視点を備え、新しい価値の創造を志している。 ⑤様々な人と関わるなかで、自分の役割への認識を高めていくことを目指している。
	S女子 短大	〈ディプロマ・ポリシー〉 1. 「順和、礼譲、敬愛、奉仕」の学園訓を身に付け、女性の可能性を広げ、国際・地域社会の発展に貢献できる人 〈評価基準〉 ①建学の精神に則り、社会人・職業人として必要な基本的な生活習慣や態度 (時間厳守、適切な言葉づかい、挨拶、礼儀) を身に付けている。 ②授業や行事等に積極的に関わり、自主的に学習していく姿勢・態度を身に付けている。 ③地域社会のイベントや地域内のボランティア活動等に積極的、主体的に参加したり、取り組んだりしている。
応用	JCKK スタンダード	⑥職業人として、様々な人との交流ができ、行動をもって地域社会に貢献できる人
	S女子 短大	〈ディプロマ・ポリシー〉 2. 言語を問わず、さまざまな人とコミュニケーションをとり、積極的に協働できる。 〈評価基準〉 ④母国語以外の言語やツール (言葉以外) を使って、コミュニケーションを取ることができる。 ⑤自分の意見を持ち、人の意見を聞くことを心がけ、他者との対話を通じて物事を進めていくことができる。

5.3.2 S女子短大 (佐賀女子短期大学地域みらい学科グローバル共生 IT コース) の学修成果との比較

表7は、保育分野と同様に、総合系分野の学修成果 JCKK スタンダード 4次元分類表に従って、S女子短大の学修成果 (ディプロマ・ポリシー/評価基準) を振り分けたものである。

保育系の部分で述べたとおり、S女子短大の学修成果は、

ディプロマ・ポリシーと、それに基づいて定められた「評価基準」という形で示されている。各コースのディプロマ・ポリシーは全学的なポリシーを最初に掲げて2つ目以降に専門分野のポリシーを設定、これに基づいた「評価基準」が各々数項目定められており、各項目に5レベルのルーブリックを設けている。

当該コースでは、JCCCK スタンダードの4次元分類における知識・技能と応用の一部を、「多文化共生力、専門的知識・技能（外国語力、ビジネス能力、司書としての技能、IT とデザインに関わる専門的知識・技能）を国際・地域社会で主体的に活用できる」という形でひとくくりカテゴリライズし、これに加えて、「言語を問わず、さまざまな人とコミュニケーションをとり、積極的に協働できる」という汎用性の高い応用的内容の、2つのカテゴリで専門分野のディプロマ・ポリシーを構成している。なお、いわゆる士業分野のような限定的な専門分野ではないため、JCCCK スタンダードの「態度」にあたるポリシーは専門分野としては特に設定せず、全学で定められた汎用的ポリシーがそれに充てられている。

この1+2のポリシーの下に設定されている11項目の「評価基準」がいわゆる学修成果にあたる。その内容はJCCCK スタンダードの6項目である程度カバーされているが、N短大のケースと同様、④、⑧-1、⑧-2、⑧-3などの専門分野を限定した「評価基準」については、汎用性の高いJCCCK スタンダードと比較すると違和感が残る。

今回分析の対象となった各短期大学の学科・コースには、前身の人文・教養・家政系の学科・コースを統廃合し、地域総合科学科に代表されるようなキャリア探索型のカリキュラム編成を行なっているケースも多く、当該分野におけるJCCCK スタンダードはキャリアデザインに関わる汎用的能力の色彩が濃い。それに対して、S女子短大の当該コースはかつて地域総合科学科として適格認定を受けていたが、その後の改組によって現在では外国語（英語）・司書・IT デザインに専門分野を限定したカリキュラムとなっており、キャリア探索型の色彩は薄れている。

N短大の項でも指摘されているが、各短大の総合系分野の具体の在り方は多岐にわたっている。いささか旧聞に属するが、中教審の短大WGへ在り方の見直しに関する意見具申があったように、地域総合科学科は短期大学のユニークな特色の一つであり、それをどのように定義するか

は、当JCCCKの研究センターで長年議論を重ねてきた課題でもある。地域性、学際性、キャリア探索性、あるいは専門性やそれ以外の、何をもって総合系分野を位置付け、そのスタンダードを定めるのか、改めて議論を深めることが求められよう。

以上の保育系と総合系の分析からは、テキストの内容がいずれも態度・志向性、知識・技能、実践力の3つの成果指標に大別されることが示され、細分化によりそれぞれに汎用的・専門的要素を備えていると考えられた。保育系と総合系の双方に共通する単語要素については、汎用的な能力要素として共通する側面も含まれるが、テキストからはそれぞれの専門的な観点から捉えられたものであると考えられた。汎用的な能力要素として共通する側面は、短大教育における独自の教育、教養教育あるいは専門分野での基本的な教育として位置づけられていると考えられる。

6. 今後の課題

教育課程レベルの学修成果目標に基づく「JCCCK スタンダード」の作成によって、各校のディプロマ・ポリシー（学修成果目標）について、認証評価に係る位置づけや社会的な標準的通用性を点検することが可能となった。またこれらの議論が深められることで、各短大の教育の質の保証や特色づくりに寄与することが期待でき、その有用性が見出された。今回、試行的に作成した保育系、総合系のスタンダードについては、個別短大との比較検討から、具体性、用語の使用とその解釈等について課題が残された。このことについては、調査校を増やすことにより共通性が高いスタンダードが構築できるものとする。また、各校の方針等によっては、具体性を備える学修成果目標が、機関レベルや科目レベルに位置付けられる場合もあり、これらの目標も含めた詳細な調査分析も必要と考える。学修成果目標のタキソノミーにおいては、卒後就職先となる専門分野別コンピテンシー、大学や専門学校、高等学校との比較検討が今後の課題として残される。

とりわけ高校教育の「コア」を構成する資質・能力について、高等教育関係の政策議論などでは、その接続関係についてまだ十分に検討・反映されていない。高校教育段階でのコアの「資質・能力」については具体例が示されており、高大接続改革の観点からも比較検討を行っていく必要がある（中央教育審議会2014）。

謝 辞

本論は、研究の背景に描いたとおりこれまでの「研究会」と「研究センター」での活動の成果であり、そのまともにあたって現在の JCKK 加盟校の教職員ならびに「研究センター」研究員のご協力並びに有意義なご助言・意見等をおいただいたことを感謝申し上げます。

注

- 1) (<https://taku910.github.io/mecab/>) 令和2年1月閲覧。分析に際しては、RMeCab パッケージに加えて Library (dplyr), (purrr), (ggdendro), (igraph), (ggplot2), (magrittr) の各パッケージを導入して行った (石田 2017)。
- 2) 本論では、主に「する」に接続される名詞を「動的要素」と称している。
- 3) 本論で使用するコンピテンシー概念は、単なる知識や技能だけでなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求 (課題) に対応することができる、社会人・職業人として必要な広義の能力の総体を意味している (文部科学省 中央教育審議会 (2018))
- 4) 「グローバル」とは、グローバルとローカルを組み合わせた造語であり、ここでは“Think Globally, Act Locally”を意味する。

参 考 文 献

- 石田基広 (2017) 『Rによるテキストマイニング入門 (第2版)』
森北出版株式会社
- 中央教育審議会 (初等中等教育分科会高等学校教育部会) (2014)
『審議まとめ「高校教育の質の確保・向上に向けて」』文部科学省
- 中央教育審議会 (2018) 『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申)』文部科学省
- OECD 編 (2009)、森利枝訳『日本の大学改革』明石書店
- 吉本圭一 (2020a) 『キャリアを拓く学びと教育』科学情報出版
- 吉本圭一 (2020b) 「教育と職業の界をつなぐ学位・資格枠組み—職業教育とその学の未来形—」日本職業教育学会『職業教育学研究』第50巻第2号、1-18頁
- 吉本圭一編 (2020) 『分野別学修成果可視化と国際的分野間横断体系化による質保証・向上(2)』、九州大学第三段階教育研究センター『職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上成果報告書』vol. 22
- 吉本圭一・亀野淳・江藤智佐子 (2020) 「第三段階教育における学修成果と職業コンピテンシーの対応に関する研究—大学と専門学校のビジネス分野を対象として—」『九州大学大学院教育学研究紀要』第22号、11-42頁

【報告】

短期大学における調査研究の活用の
スタンダードを目指して

Aiming for the Standard of Applications of Research
and Study in Junior Colleges

中濱雄一郎*¹ 小浦 康平*²

Yuichiro NAKAHAMA Kouhei KOURA

要旨 2019年度より、短期大学における認証評価は第3クールに突入した。特に重要な項目として「学習成果の可視化」をどのような形で提示するかといった問題があり、各短大でIRデータの活用機運は高まっていると思われる。しかしながら、整理したデータを組織内に浸透させ、どのように教学マネジメントをはじめとした活動に結び付けられるかについては、あまり手が付けられていないのではないだろうか。本稿は、短期大学コンソーシアム九州加盟校の事例を中心に、とりわけ香蘭女子短期大学及び長崎短期大学の事例を中心にこれまでのIR活動を紹介し、短期大学における調査研究の活用のスタンダードを目指した取り組みを提示する。

キーワード 調査研究の活用のスタンダード、学習成果の測定と活用、IRデータの組織内での活用、認証評価への対応

1. はじめに

2019年度より短期大学における認証評価の第3クールが始まった。今回主として事例紹介を行う香蘭女子短期大学と長崎短期大学は、今年度認証評価を受けた。筆者たちはそれぞれの学校において、この認証評価を受けるにあたってIRを中心としたデータ整理などに関わる機会があったのだが、何をもって「IR活動」をしたとみなすのか、もっと言えば、どういう「IR活動」を行えば、学校運営がよくなったり、学生が成長したりするのかを考えながらのデータ整理となった経験を共通して持った。

中井他(2013)によると、IRとは、「機関の計画立案、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する目的で、高等教育機関の内部で行われる調査研究」と定義されている。¹⁾IRの定義は本場のアメリカでも難しく、多くの要因の影響を受けながら独自の発展を遂げたことが知られている。

本稿ではこうしたIRの定義といった学術的な側面よりも、認証評価を実際に受けた教員がどのようにデータを作成し、それを組織内に浸透させようと努めてきたかといった実際の場面を中心に提示できればと考えている。また、どちらかと言えば、集計したデータをどのように組織に還元し、学内の教職員のFD・SDに活用したり、教育カリキュラムの改善につなげて、学生を育成するかを検討するという実際の側面について情報提供したいと考えている。

というのも、認証評価を受けるにあたり見栄えの良いデータの加工の仕方等に興味関心が集まるのは実際に認証評価を受けた身からしてもわかるのだが、いくらデータを

* 著者紹介

*¹ 香蘭女子短期大学ライフプランニング総合学科 教授
〒811-1311 福岡市南区横手1-2-1
tel : 092-581-1538
e-mail : nakahama@koran.ac.jp

*² 長崎短期大学保育学科 講師
〒858-0925 長崎県佐世保市椎木町600
tel : 0956-47-5566
e-mail : k_koura@njc.ac.jp

見栄え良く作ったとしてもそれが活用されなければ宝の持ち腐れになるだけであるし、情報は活用されてこそ意義あるものになると考えるからである。

もちろん、IR データを用いた EM(Enrollment Management) 活動は近年認知度を高めていると思われるが、短期大学の多くは小中規模校がほとんどであり、クラス制をとっている学校も多く、クラス担任を支援するツールとしてどのように活用するかといったことに関しては、まだまだ十分な情報の蓄積がないので、短大の EM に関しては別の機会に考えることとしたい。

本稿の構成は次のとおりである。次節では IR データの組織内の活用に絞って過去の研究をレビューし、第3節では短期大学コンソーシアム九州内での各校の取り組みを紹介する。続く第4節では、香蘭女子短期大学の IR と組織内での運用事例を紹介し、第5節で、長崎短期大学の事例を紹介する。第6節は本稿のまとめである。

2. レビュー

日本国内で IR 活動が高等教育の現場で意識されるようになって少なくとも7～8年が経とうとしているが、学術的な IR 研究に関しては、まとまったものとして、高等教育学会編(2016)や小林・山田(2016)があるものの、実践的な取り組みで且つ短期大学を対象としたものは、あまり見受けられない。

香蘭女子短期大学及び長崎短期大学がともに参加している短期大学コンソーシアム九州(以下、JCKK)が発行している研究紀要「短期高等教育研究」を見ても、論文タイトルに「IR」があるものは、吉本・稲永(2016)、中濱(2017)など一部に限られ、短大における「IR」研究はまだまだこれからであるし、本稿が目指している「IR」データと学内組織での運用・活用に関しては、短期大学の全体像を把握するには今しばらくの時間が必要だと思われる。

ところで、先日公表された文部科学省(2018)は、多くの方の注目を集めたが、同答申によると、短期大学についての記述は、p.42に若干ある程度で、今後「大学制度における短期大学の位置付けの再構築について検討することも必要」と記載されているだけであった。つまり、国として短期大学に求める内容については明記されていない状況ではないかと受け止めている。であれば、われわれ短期大学に所属する教職員が、4年制大学を中心に書かれてい

る同答中等を読み解き、準備を重ねるしかないと考えた次第である。

同答申内で筆者たちが注目したのは、「教学マネジメント」に関する記述であり、カリキュラム編成の高度化、学生個人の学修成果の把握、教学 IR 体制の確立、を求めている部分である(同答申 p.31)。つまり、これまではアセスメント、ガバナンス、FD・SD など個別の取り組むべき活動について、実は「教学マネジメント」として大きく括ることが可能であり、学校全体として取り組むものとして提示されたことは大きな変化ではないかと捉えている。

また、2019年に入り、「教学マネジメント指針(案)」が提示され、議論の中身が少しずつ明らかになってきているが、2020年3月時点で確認できる最新の同(案)によると、「各大学における教学 IR の実施は、大学の規模等に応じて多様な在り方が考えられることから、各大学において最適な体制や方法を見出していく必要がある。」(p.33)とされていることからわかる通り、自らの組織を顧みつつ、最適な方法を検討する必要があることがわかる。

つまり、私たちは自校の教育に対して、認証評価等の外部評価への対応を考えることは当然のこととして、日々の教育において、内部質保証を意識する必要がある、その中核に「IR 活動」がある。また、同時に、「IR 活動」の一環としてデータの集計や加工を行うのであるが、それは自らの組織内への還元を行うことではじめて威力を発揮するものであり、学内で議論を重ね、それが FD・SD 活動の強化やカリキュラムの変更などに繋がり、組織内の PDCA を結果として回していく、そういう流れを作ることが重要だと述べているものと受け止めている。

では、そういう実践をやっていないのかと言えば、公になっていないだけで、各大学・短大が実践されているはずであろう。しかし、その情報がオープンにはなっていないため、自学の活動がうまく行っているかどうかの確信が持てないという短大が多いのではないかと考えており、節をかえて、まずは JCKK 内の IR 活動と自校内での情報の還元等を中心に紹介したい。

3. JCKK 内の事例

JCKK 加盟校は、平成24年に「大学間連携共同教育推進事業」に採択され、2017年3月に「短期大学士教育課程

の職業・キャリア教育と共同教学 IR ネットワークシステム」というタイトルで最終報告書を上梓している。この報告書にも書かれているが、本事業を通じて、7つの短大が共同して「在学生アンケート調査」、「卒業生調査」などを行い、単独の短大だけでは得られないデータを獲得し、自校と他の6短大との比較を通じ、自校の特徴をより深く理解できるようになった。

そこで、まずは香蘭女子短期大学と長崎短期大学以外の加盟校が共同 IR 活動を通じて、どのように組織内へ還元したのかについての絞って報告する。

3.1 佐賀女子短期大学

IR ネットワークシステムの学生調査では、連携校で実施している在学生調査・卒業時調査を行ない、その内容を即時に学生にフィードバックできることの有効性が確認されたため、従来、紙ベースで実施してきた授業評価のアンケートを、平成27年度よりこのシステムで実施している。

また、平成26年度より、本事業で構築した学生調査システムを使用して、生活習慣やコミュニケーション力、課題発見力、理科的・社会的体験等に関する短大生の体験・活動的レディネス調査を毎年継続して実施してきた。

この結果、平成27年度には全学共通の基礎教育科目として「佐賀を歩く」（1年後期演習2単位：選択必修）を新設した。これは、学生が主体的にテーマを設定して地域に出かけて調査・実践活動を行ない、それをまとめて発表するという科目である。また、地産品を使った加工食品の開発や、伝統的食の継承活動、地元大手企業と連携しての長期インターンシップなど、各学科・専攻・コースの専門分野に応じた AL の開発・実践をスタートさせた。

さらに、平成29年度には、キャリアデザイン学科と健康福祉学科を統合して「地域みらい学科」に改組転換し、専門分野・領域横断的に地域の課題を発見・解決することを目指す PBL 型の「地域みらい学」を新設するなど、地域連携とグローバル化を充実・強化して、短大ならではの職業・キャリア教育を展開する計画である。

3.2 精華女子短期大学

本学の教育成果を検証するため「在学生調査及び卒業時調査」の分析を通して学生の学びと学生生活に関する検討を行っている。その結果「授業内容・方法」、「教員の指導」、

「学生生活のサポート」の項目を中心に各学科・専攻の傾向を把握することができ、本学の教育や学習支援などの満足度について、在学時調査よりも卒業時調査の方が学生の満足度が上昇していることが明らかとなった（2017年度）。

JCKK 内で実施している「学生調査（在学時、卒業時、卒業後）」以外での本学独自の学生調査を各種委員会が中心となり検討を開始しており、2018年度より IR システムを使用した「学生環境調査」等の実施を計画した。

具体的なカリキュラム上の変化として、医療事務認定試験対策等の各種資格の試験対策にも取り組むことが可能となり、これらのシステムを導入することにより、双方向授業や e-learning システムの活用、ネット試験など、学生の興味・関心の訴求や知識の定着が図られ、主体的学修を効果的に進めることができると考えている。

3.3 長崎女子短期大学

「WIL 先進校の事例研究に基づく教育改善」として、京都産業大学の地域交流・地域貢献のイベントを参考に、生活創造学科ビジネス・医療秘書コースのゼミナールの授業で、学生による公開講座を2つ開講した。

①1つは秘書実務やマナー学の授業を取り入れた「小学生対象の親子マナー教室」、②もう1つはビジネス文書作成やオフィス情報演習の授業を取り入れた「高齢者対象の Word による会報の作り方」講座である。いずれも地域住民との交流を通して、児童や高齢者との接し方や教え方の勉強になったようである。

「学生調査」による学修成果の到達度と学生支援の満足度、学修行動の積極性について、①連携7短大と本学を比較した結果、本学の強みは「最後までやりぬく力」「チームで仕事をする力」「多様なものの見方を知って受け入れること」「一般的な常識・礼儀・マナー」であり、弱みは「リーダーシップ」であることがわかった。②また、教務データの GPA とリンクして学生個々の学修成果の可視化グラフを作成した結果、学科・コース内で顕著に学生支援の満足度や学修行動の積極性が低く、さらに、学業成績の到達度も低い学生の存在が明確となった。この結果を踏まえて以下の2点の改善に取り組んだ。

①まず、リーダーシップの弱みを解消する授業改善として、2年生が1年生に履歴書・エントリーシートの書き方、面接試験の受け答えについて、助言・指導をする「学生ピ

アサポートの活動」を1・2年生合同のキャリアアップセミナーの授業で実施した。その結果、2年生は1年生をリードすることにより、後輩からの感謝や評価を受け、自己肯定感や自己効力感が多少なりとも生じ、就職活動への意欲や主体性が芽生えたようである。②また、学科・コース内で顕著に学生支援の満足度や学修行動の積極性、学業成績の到達度が低い学生の存在が明確となったことから、学生一人一人への個別支援として、当該学生への「声掛け・個人面談・個別支援などの働き掛けを継続的に実施した。その結果、自分のことを気にかけてくれる教員の存在が、自分の存在意義や存在価値の自覚へと繋がり、以前よりも明るく元気な表情になり、欠席・遅刻も減少して、インターンシップへの参加を希望するまでに、意欲的で前向きになった成功事例がある。

3.4 西九州大学短期大学部

本学は既存の教学システムを開発導入しているなかで、本事業の共通調査システムを効率よく導入することが可能となり、本調査のほか必要に応じて学内調査に利用できるようになった。当初の在学生調査では、本学のIR活動への着手と教育の質保証に向けた具体的な取り組みに大いに貢献し、FD活動等における授業改善、シラバスや授業評価を強化し、エンrollment・マネジメントとして学修行動や生活の実態を把握する教学改革の基礎的データとして、また教育の特色化として、地域社会が求める人材育成に対する点検・改善の方向付けに有効に活用された。本事業調査（入学半年経過時調査と卒業時調査）の運営においては、恒常的に調査する年間計画が調整され、滞りなく学生調査を実施することが可能となっている。学内調査の結果は、教授会で報告され、学生支援に必要なエビデンスとして他の学内調査結果と合わせて有効に活用されている。連携校間の比較調査は、IR室へ報告され、学生の特徴やエンrollment・マネジメントの支援充実に向けた今後の課題等を見出すためのエビデンスとして活用されている。今後は、大学・専門学校等との比較から短期大学固有の特徴や課題等を見出すなかで、改善・充実に向けた方策等が検討されることが期待される。また、共通調査の実施に際しては、評価・検証部会において調査の目的を理解するなかで、毎年の質問設定等の議論は学内調査の精査にもつながっている。

4. 香蘭女子短期大学の事例

本学のIR委員会は、平成27年1月に発足した。本学のIR委員会が発足した当初の紹介は、中濱（2017）に詳細を提示しているのので、委員会の立ち上げなどに興味がある方はそちらを参照していただきたい。

現在の活動は、主として、1）毎月の定例会議の実施、2）各種の学生アンケート調査の実施（①在学生調査（1,2年生）、②卒業生調査、③入学時調査、④学生マナー調査、⑤レディネス調査）、3）IR委員会年次レポートの作成と発行、4）IR研修会の企画立案・実施、を行っている。

上記に加え、本学では、独自のアンケート調査として、平成27年度より「学生マナー調査」、平成28年度より「入学時調査」、をこのIRネットワークシステムを活用し、実施している。前者は、本学の学生指導委員会からの要請で行っているものであり、本学が独自にまとめた学生のマナーの向上のための重点項目（6項目）を中心に学生へ質問し、自らの行動の振り返りとともに、この指導が全体に行き届いているかのチェックを行った。この調査の結果は、2年生のデータと合わせて、年度末の学生指導委員会にて報告を行っている。

令和1年度に関しては、昨年度と比較していくつか特徴的なことが判明した。ひとつは、受講態度に関して、学科間でボリュームゾーンが異なった点である。おそらく、学生自身の自己判断として、あまりまじめに受けてこなかったという学生が多い場合、当該学科の教員が授業をうまく展開しづらくなったり、学生の学びの質が低下したりという影響が考えられる。また、この原因がどこにあるのか、すなわち、入学生の性質が変わってきたのか、それとも教員の教え方が問題なのか、をきちんと検討する必要が出てくる。

次に、本学では、地域での活動を推奨しているが、学科間でかなりばらつきが出た。ある学科では、熱中して参加する学生のグループと全く参加しないグループが存在したり、別の学科では、地域の活動に参加したと申告する学生が、昨年比で大幅に減少したりという現象が見受けられた。

学業が急に忙しくなったという風には考えられないため、地域での活動について、教員間で今一度話し合っほしいという依頼を行った。

また、「入学時調査」は、本学の入試広報課と心理学を専門とする教員と共同で質問項目を作成し、入学生の特性

を早期に掴むことと、新入生に本学の Web 調査システムに早目に慣れてもらうために企画された。調査結果は、年次レポートと IR 研修会において報告し、エビデンスに基づく意思決定の材料として利用されている。

2019年版では、従来行ってきた各種の調査の分析に加え、あまりきちんと取り上げられてこなかった GRIT（やりぬく力）²⁾に関する分析結果が加えられた。分析の結果、「粘り強さ」が短大入学後の成績を維持する上で重要な因子であることが明らかになった。しかし、GRIT を形成するもう一つの因子である「情熱」に関しては、反対の関係が見受けられ、なぜこのような事態が起きるのかについて現在検討中である。

少なくとも、「あきらめない」気持ちは、課題や試験勉強を簡単に投げ出さないという行動に直結し、良い成績に繋がっていると思われるが、「情熱」は、一過性のことが多々あり、「熱しやすく、冷めやすい」という部分が出てきたのかもしれない、という風に現時点では受け止めている。

今回は一部の学科のみで実施したため、他学科を含めて、追跡調査をし、入学前の性質によってある程度成績が決まるのであれば、GRIT は事後的に伸ばすことができる能力なので、こうした教育プログラムの開発・導入が必要なかもしれないというのが現時点での感想である。

5. 長崎短期大学の事例

次に、長崎短期大学の最近の IR 活用事例として、認証評価への取り組みに関する事例を紹介する。

調査研究の活用例は前述した以外にも、潜在的に多く実践されているようであるが、その実践内容をオープンにする機会は少ないと考える。本節ではその開示の一例として長崎短期大学で具体的にどのような情報を組織内へ還元したか等についてまとめる。

5.1 学習成果測定データの構築について

長崎短期大学では2019年度の認証評価を見据えて様々な準備を行ってきた。認証評価における IR 活用とは、学修成果の可視化に重心が置かれるものであると考える。本編では、教学共同 IR ネットワークシステムのアンケート機能の活用を含め、学修成果を可視化するための複数のツールの構築と経緯について、長崎短期大学での IR 活用

のひとつの事例として紹介する。

5.2 データ構築の流れ

IR 活用（認証評価に向けた報告資料作成）の流れとしては以下の通りである（図1）。従来であればアンケート集計や考察を学科レベルで直接実施していたため、どうしても学科間でのまとめ方や様式に差が出てしまい、足並みを揃えることに苦労してしまう懸念があった。



図1、IR 活用の流れ

今年度は ALO（Accreditation Liaison Officer）指導のもと、認証評価の報告書完成をゴールとして設定し準備をスタートした。まずは IR 部門で全学科すべてのデータを整理し、次に FD/SD や学科会議で内容を報告しつつ、エビデンスを基にした情報共有を図りながら最終的に各学科で報告をまとめた。

5.3 学修成果の可視化に使用したデータツール

IR 部門として2018年度卒業生を対象とした以下①～③のアンケート結果及び④⑤の内容を整理し、各学科へ還元した。

- ① セメスター到達目標アンケート結果
- ② ディプロマポリシー到達アンケート結果
- ③ GPA 分布と授業到達アンケート結果
- ④ PROG テストとディプロマポリシーの紐付け
- ⑤ カリキュラムマトリックスの重点度得点化によるディプロマポリシー配分比率

※①②③のアンケートについては短期大学コンソーシアム

九州に加盟の他短大でも使用されている『Acitve Portal』のアンケート機能を使用している。

5.4 各データの詳細

①セメスター到達目標アンケート結果

ディプロマポリシーを基に設定されたセメスター到達目標について、共同教学 IR ネットワークシステム (Active Portal) の機能の一つである学生調査アンケートシステムを用いて、学生が5段階評価で自己評価したアンケート結果を集計した。

集計した結果は各学科コース専攻で話し合い、カリキュラム改善へのきっかけのひとつとした。

②ディプロマポリシーアンケート結果

各学科のディプロマポリシー到達度アンケートを卒業直前の2年生に対し実施した。集計した結果は①セメスター到達目標アンケートと同様に、各学科で話し合い、学修成果の指標にすると共に、次年度に向けたカリキュラム改善へのツールのひとつとした。

③ GPA 分布と授業アンケート結果

各学科のセメスターごとの GPA 分布グラフから、学生の GPA を中央値で2分し、授業の到達度アンケート (5段階自己評価) 結果にどのような差が出るかを考察した。結果としては、GPA が中央値以上の学生は授業到達アンケートの自己評価も概ね高い値を示し、中央値以下の学生は自己評価が比較的低い結果を示す傾向が見られた。(データは割愛)

④ PROG テストとディプロマポリシーの紐付け

長崎短期大学では社会人基礎力に関する学修成果を測定すべく PROG テスト (河合塾&リアセック) を2年間で3回測定 (入学直後、1年生修了時、卒業直前) している。PROG のコンピテンシー33項目を学科ごとにディプロマポリシーと紐付けした一覧表を作成し、PROG テストの測定結果をディプロマポリシーと掛け合わせて考察した。結論として、PROG のコンピテンシーからは学修成果の判断材料として理論立てた傾向を見つけることは困難だった。しかし、学生個別の単位で資質や性格などを考慮しながら確認してみると、多少は理論立てできる測定結果も

あった。例えば3回の測定を通して、学生が実習やインターンシップを経験することで自信を得る場面があり、社会の厳しさ (自分の足りなさ) を実感することが3回の測定での数値の上下動に現れているのではないかとの考察に至った。

⑤カリキュラムマトリックスの重点度得点化によるディプロマポリシー配分比率

各学科でカリキュラムマトリックス及びカリキュラムフローチャートを作成している。授業科目1単位に対し重点度得点として5ポイントを設定し、ディプロマポリシーの5項目 (「心豊かな人間力」、「専門的知識や技能」、「課題解決能力」、「コミュニケーション能力」、「主体的に学ぶ力」) のいずれに重心が置かれる授業であるかを得点化した表をまとめた。さらにセメスターごとに基礎科目と専門科目に分け、100%積上げ横帯グラフに示した (グラフ1)。これによりセメスターごとのディプロマポリシーの偏りを確認し、セメスター単位での授業編成・改善に役立つツールのひとつとした。例えばグラフ1の保育学科保育専攻からは、他のセメスターと比較して2年生前期が最もコミュニケーション能力の養成を重視している科目が多いセメスターであることが分かった。実際に本学の保育学科保育専攻の2年生前期は教育実習の時期であり、実習準備や振り返りのような比較的コミュニケーションを重要視する科目も多く存在している。逆に「専門的知識や技能」においては1年生前期後期で特に重点が置かれており、2年生後期でも更なるスキルアップ科目が編成されていることが図2からも客観的に理解できた。また、実際には、専門科目と基礎教育科目を比較した考察も可能であった。

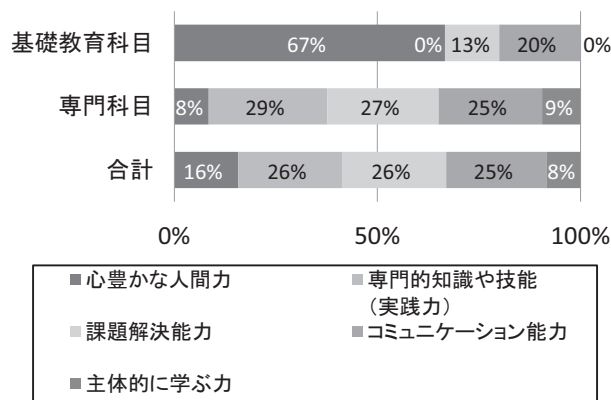


図2、カリキュラムマトリックス比率の事例 (保育学科保育専攻2年生前期)

5.5 認証評価に向けた準備

学修成果の可視化に向けて模索検討を行ってきたところ、大きく2つの方向性が考えられた。

- I. 共同教学 IR ネットワークシステムを活用したデータの集計結果及び GPA 分布を絡めた考察
- II. ディプロマポリシーと、授業カリキュラムや PORG コンピテンシー項目の関連付けからの考察

I の学生の自己評価結果及び II の高等教育機関側からの両方向からのまとめを総合的に考察することで、全体的な学修成果の可視化の資料とした。

6. 今後の課題（結びにかえて）

短期大学における「IR」の定義づけは多様な解釈があるため容易ではなく、学内組織で日常的に自然な形で安定的に運用・活用していくことは各短大とも苦勞されていると考える。また、データ分析結果は発表されて終わりではなく、実践的に活用されてこそ意義があると考ええる。JCKK では長年調査研究を行い、前述の通り各短大での様々な IR 活動を通じて組織的に還元してきた。

IR の活用については、教学マネジメント指針（案）にもあるように、多様な在り方が考えられ、各大学において最適な体制や方法を見出していく必要があり、自らの組織を顧みながら最適な方法を検討する必要があると考える。

JCKK では、今後も IR データの活用から展開された実践の事例を積み重ねつつ、短期大学における調査研究の活用のスタンダードを目指していきたいと考える。

注1) 詳細は、小林・山田（2016）第1章を参照。

注2) GRIT（やり抜く力）とは、提唱者の一人であるアンジェラ・ダックワース氏によると、情熱と粘り強さから構成され、後天的に身に着けられる能力の一つで、人々が成功するために必要な能力とされるものである。

参 考 文 献

- アンジェラ・ダックワース著（2016）『GRIT やり抜く力』ダイヤモンド社
- 小林雅之・山田礼子編著（2016）『大学の IR』慶応大学出版会
- 短期大学コンソーシアム九州（2017）『短期大学士教育課程の職業・キャリア教育と共同教学 IR ネットワークシステム』最終報告書
- 中央教育審議会（2019）「教育マネジメント指針（案）」教学マネ

- ジメント特別委員会（第12回）会議資料
- 中井俊樹・鳥居朋子・藤井都百編著（2013）『大学の IR Q&A』玉川大学出版部
- 中濱雄一郎（2017）「香蘭女子短期大学 IR 委員会活動報告」短期大学コンソーシアム九州紀要『短期高等教育研究』Vol. 7、p. 41-45.
- 日本高等教育学会編（2016）『高等教育研究における IR』高等教育研究第19集 玉川大学出版部
- 文部科学省中央教育審議会（2018）「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」
- 吉本圭一・稲永由紀（2016）「IR のための分野対応型 web 卒業生調査の研究—第三段階教育における職業教育の学修成果把握の方法論として—」短期大学コンソーシアム九州紀要『短期高等教育研究』Vol. 6、p. 5-19.

【資料】

短期大学コンソーシアム九州による 調査スタンダードの制度設計 (資料)

Institutional design of the research standard
by the junior college consortium Kyushu

武藤 玲路^{*1} 渡邊 和明^{*2}

Ryoji MUTO Kazuaki WATANABE

要旨 短期大学コンソーシアム九州 (JCKK) の加盟短大は、これまで約3万件の短大ステークホルダーに対して、在学生調査、卒業時調査、卒業生調査、就職先調査、高校進路担当者調査を実施してきた。その結果、短大教育の特色や強み、有用性を検討する手法を得ることができた。しかし、これらのJCKK 共通調査について、これまで全調査の目的や手法を体系的に捉えた調査スタンダードを十分検討してこなかった。そこで本稿では、短大教育の改革・改善、向上・充実の根拠となる情報を得るために、短大コンソーシアム九州の全短大で標準化した調査スタンダードの制度設計について検討することを目的とした。具体的には、まず、過去15年間のJCKK 共通調査の実施状況や各短大の学内学生調査の実施状況、および希望する調査領域や調査項目のデータを収集し、共通調査の目的別と対象別の制度設計について提案することにした。今回検討した調査は、①在学生調査、②卒業時調査、③卒業生調査、④就職先調査、⑤高校生調査であり、これらの調査目的、調査対象、調査手法、質問領域、質問項目、実施年度・実施時期を一体的・体系的に示すことができた。

キーワード 短期大学 共通調査、スタンダード、制度設計、質問項目

1. 問題と目的

2002 (平成14) 年9月に福岡・佐賀・長崎の北部九州に位置する短期大学は、「短期大学の将来構想に関する研究会 (略称CC研: Community College 研究会)」を発足した。CC研は「短期大学の発展存続のための改革論議を地方から」という志の下に集まった短大教職員有志と高等教育研究者で構成された任意の団体である。その後、2009

(平成21) 年10月に「短期大学コンソーシアム九州 (略称JCKK: Junior College Consortium Kyushu)」の設立へと発展した (安部, 2014)。

短大コンソーシアムでは、過去15年間で短大教育の成果等を検証するために、短大在学の1年生・2年生、卒業生、卒業生の就職先、高等学校の進路担当教諭を対象とした調査によって、約3万件のデータを収集し、短大教育の特色や強み、有用性を検討する手法を得ることができた。

しかし、これらのJCKK 共通調査について、これまで全調査の目的や手法を体系的に捉えた調査スタンダードを十分検討してこなかった。そこで本稿では、短大教育の改革・改善、向上・充実の根拠となる情報を得るために、短大コンソーシアム九州の全短大で標準化した調査スタンダードの制度設計について検討することを目的とした。

* 著者紹介

*¹ 長崎女子短期大学生生活創造学科准教授

〒850-8512 長崎市弥生町19-1

TEL: 095-826-5344

e-mail: muto@nagasaki-joshi.ac.jp

*² 精華女子短期大学生生活科学科講師

〒812-0886 福岡市博多区南八幡町2-12-1

TEL: 092-591-6331

e-mail: watanabe@seika.ac.jp

具体的には、まず、過去15年間の JCKK 共通調査の実施状況や各短大の学内学生調査の実施状況、および希望する調査対象・質問領域・質問項目を集約し、共通調査の目的別と対象別の制度設計について提案することにした。

2. JCKK 共通調査の策定について

2.1. 過去15年間の JCKK 共通調査の実施状況

表1は、2004年から過去15年間に短大コンソーシアムの全加盟短大が実施した共通調査の一覧表である。調査手法は、質問紙調査、Web 調査、インタビュー調査の3種類で、調査対象は、短大在學生、短大卒業生、短大卒業生の就職先、高校の進路担当教諭など、短大と利害関係を有する短大ステークホルダーである。主な調査項目は、短大での学習行動・学習成果、短大教育・学生支援の満足度・

総合評価、現在の業種・職種、職場で必要な能力、短大教育の有用性・要望事項、短大の特色・強み、専門学校・四年制大学との違いなどである。

このような過去15年間の JCKK 共通調査の結果、多くの短大ステークホルダーから短大教育の有用性や貢献度を高く評価されていることが示唆された（安部・南里編、2018）。

2.2. 従来の JCKK 共通調査の課題

JCKK 共通調査の開始当初は、教育の質保証に資する先進的な取組として短大関係者から高く評価されていたが、年々調査目的の要求水準が高くなるに連れて、その方法論や活用法について、以下のような問題点が指摘されるようになった。

表1. 過去15年間の JCKK 共通調査の実施状況

	時期	調査名称	調査手法	調査対象	主な質問項目	回答件数
1	2004年～2006年	卒業生調査	質問紙	卒後2・4・8年目の卒業生	現在の業種・職種、職場で必要な能力、短大教育の有用性・総合評価	2,835件
2	2006年	卒業生調査	インタビュー	卒後7年目の卒業生	現在の業種・職種、職場で必要な能力、短大教育の有用性・総合評価	8件
3	2006年～2007年	卒業生採用先・進学先調査	インタビュー	卒業生の採用先・進学先の担当者	短大の特色・強み、専門学校・四年制大学との違い、短大教育への期待・要望	14件
4	2007年～2009年	卒業生就職先調査	質問紙	卒業生の就職先の事業所	短大の特色・強み、専門学校・四年制大学との違い、短大教育への期待・要望	249件
5	2009年	高校教員調査	インタビュー	高校の進路担当の教員	短大の特色・強み、専門学校・四年制大学との違い、短大教育への期待・要望	26件
6	2009年～2012年	短大生パネル調査	質問紙	全国の短大の在学1・2年生・卒後1年目の卒業生	短大での学修行動・学修成果、短大教育・学生支援の満足度・総合評価 現在の業種・職種、職場で必要な能力、短大教育の有用性・要望事項	延べ7,859件
7	2010年	高校-短大連携活動・事業調査	質問紙	私立短期大学	高校-大学連携の実績(時期・対象・内容)・成果・課題・期待・要望	361件
8	2013年	在學生調査	Web	在学1年生	短大での学修行動・学修成果、短大教育・学生支援の満足度・総合評価	1,431件
9	2014年	在學生調査	Web	在学1・2年生	短大での学修行動・学修成果、短大教育・学生支援の満足度・総合評価	2,885件
10	2015年	在學生調査	Web	在学1・2年生	短大での学修行動・学修成果、短大教育・学生支援の満足度・総合評価	2,627件
11	2016年	在學生調査	Web	在学1・2年生	短大での学修行動・学修成果、短大教育・学生支援の満足度・総合評価	2,943件
12	2016年	卒業生調査	Web	卒後2年目の卒業生	現在の業種・職種、職場で必要な能力、短大教育の有用性・総合評価	142件
13	2017年	在學生調査	Web	在学1・2年生	短大での学修行動・学修成果、短大教育・学生支援の満足度・総合評価	2,814件
14	2018年	在學生調査	Web	在学1・2年生	短大での学修行動・学修成果、短大教育・学生支援の満足度・総合評価	2,482件
15	2018年	卒業生調査	Web	卒後2・4年目の卒業生	現在の業種・職種、職場で必要な能力、短大教育の有用性・総合評価	364件
16	2019年	在學生調査	Web	在学1・2年生	短大での学修行動・学修成果、短大教育・学生支援の満足度・総合評価	2,282件
合計						29,322件

表2. 各短大における独自の学生調査実施状況 (2018. 10. 13現在)

短大名	調査名称	調査主体	調査対象	対象人数	実施時期	調査時間	主な質問項目	記名/無記名	他アンケートの紐付け可/不可	集計方法・分析方法・グラフの種類など	調査結果の活用方法 (紐付けしている場合には何のデータを用いているのか)	調査結果の公表対象	調査期間示可/不可
1	香麗女子短期大学	IR委員会	新入学生 (1年生)	1年生	4月	30分	入試形態、高校時の進路選択、心理的要因、グリップ調査	記名	可	単純集計、平均値算出	入学生の動向把握	学内教職員 (レポート)	可
2	佐賀女子短期大学	IR委員会	全学生	全学	11月	10分	重点マナー項目の認知と意識	記名	可	単純集計、平均値算出	学生指導	学生指導委員会	可
3	佐賀女子短期大学	学生委員会	1年生	全員	1月	10~20分	授業、教員、事務員、友人関係、進路、総合評価	無記名	不可	単純集計、平均値算出	教育改善	教職員	可
4	佐賀女子短期大学	学生委員会	2年生	全員	3月	10~20分	授業、教員、事務員、友人関係、進路、総合評価	無記名	不可	単純集計、平均値算出	教育改善	教職員	可
5	精華女子短期大学	幼児保育学科、食物栄養専攻、生活総合ビジネス	1・2年生	約650名	学期初めおよび学期末	約20分	社会人基礎力、学修成果、生活面	記名	可	個人の推移	学生指導	教職員、学生	可
6	〃	幼児保育学科	1・2年生	約300名	実習終了後	不明	学修成果、勤務態度	記名	可	単純集計	学生指導	教職員、学生	可
7	〃	幼児保育学科	1・2年生	約300名	実習終了後	約10分	学修成果、勤務態度	記名	可	特になし	他者評価 (学外実習評価)との比較	教職員、学生	可
8	〃	食物栄養専攻	1年生	約100名	実習終了後	不明	学修成果、勤務態度	記名	可	特になし	学生指導	教職員	可
9	〃	生活総合ビジネス	1年生	約50名	実習終了後	不明	学修成果、勤務態度	記名	可	単純集計	学生指導	教職員、学生	可
10	長崎女子短期大学	全学 (IR推進部)	1年生	約190	4月	20分	学習時間、情報収集、入学理由、学修成果	記名	可	単純集計、平均値算出	成果検証、教育改善	教職員、(学生、学外)	可
11	〃	全学 (IR推進部)	2年生	約190	2月	10分	学修・生活・進路交換後の満足度、学修成果	記名	可	単純集計、平均値算出	成果検証、教育改善	教職員、(学生、学外)	可
12	〃	栄養学科 (栄養士実習)	栄養士コース	約90	実習最終日	不明	出席状況、学修成果、特記事項	記名	可	単純集計、平均値算出	成績評価、学生指導	教職員、(学生本人)	可
13	〃	ビジネス・医療秘書コース	ビジネス・医療秘書コース	約55	実習最終日	不明	出席状況、学修成果、特記事項	記名	可	単純集計、平均値算出	成績評価、学生指導	教職員、(学生本人)	可
14	〃	介護福祉士コース	介護福祉士コース	約25	実習最終日	不明	出席状況、学修成果、特記事項	記名	可	単純集計、平均値算出	成績評価、学生指導	教職員、(学生本人)	可
15	〃	幼児教育学科	幼児教育学科	約210	実習最終日	不明	出席状況、学修成果、特記事項	記名	可	単純集計、平均値算出	成績評価、学生指導	教職員、(学生本人)	可
16	長崎短期大学	授業支援課	全学生 (専攻科を含む)	約500	各セメスター・クオーター末毎	15~20分程度	各科目の到達度評価	記名	可	本学教育システム WEB上で度数 分布、グラフ化が可能	単独で授業改善に活かして。他のアンケートの紐づけは使用中	学内教職員	可
17	〃	Awesome Subject Project 推進室	国際コミュニケーション学科1年生、日本人学生	44名	H29年7月28日	15~20分	キヤンプラザで行う学外学修体験プログラム (留学・インターンシップ、サービストラニニング) について、実施後に学生がどのようになっているかを問う内容	記名	可	アンケートを用いて回答を集め、その後、単純集計表に回答項目ごとに (人数、%) を記載した。	国際コミュニケーション学科と 結果を共有し、その後、AP事業 評価部委員会の配布資料、平成 29年度「大学教育再生加速プロ グラム」事業成果報告書「原稿」と して活用した。	学外・学内	可
18	〃	Awesome Subject Project 推進室	国際コミュニケーション学科1年生、日本人学生	30名	H30年1月19日	15~20分	4学期制とキヤンプラザで行う学外学修体験プログラム (留学・インターンシップ、サービストラニニング) について、実施後に学生がどのようになっているかを問う内容	無記名	可	アンケートを用いて回答を集め、その後、単純集計表に回答項目ごとに (人数、%) を記載した。	国際コミュニケーション学科と 結果を共有し、その後、AP事業 評価部委員会の配布資料、平成 29年度「大学教育再生加速プロ グラム」事業成果報告書「原稿」と して活用した。	学外・学内	可
19	〃	茶道文化	学生	約500	学期・セメスター末	10分	到達日数とテーマ、概要	記名	可	単純集計	授業改善	学内	可
20	〃	体育専攻	ポランティア活動に参加した体育専攻1年生	105名	1月~3月	15~20分	共通性6版30項目、対象別他行動6版20項目	記名	可	本学教育システム WEB上で度数 分布、グラフ化が可能	ボランティア参加学生の体育実 践力の測定、及び学修成果測定 に利用予定	学内教職員	可
21	〃	学生委員会 (学友会担当)	学友会執行部	35名	H.30年1月	10~20分	学友会リーダーズキャンパスに参加した学生に対して、参加の感想や実施形態の認識を問う。	無記名	不可	単純集計	次年度以降のリーダーズキャン パスの改善	学内教職員	可
22	〃	食物栄養士コース	食物栄養士コース学生	66名	H.29年11月	10~20分	食物栄養士コースのボランティア活動に参加し、自分に不足している点や今後の活動に対する意識を参加したボランティア活動や学生の役割ごとに確認し、ボランティア活動の学生の成長における効果について伺う。	記名	可	単純集計後にPROCTテストの結果と比較し、必要に応じて報告書 理を準備する	取り組みと学生の成長に関して は今後学会発表を予定している。 内容の詳細に関しては今後のボ ランティア活動の参考とする。	学外・学内	可
23	西九州大学短期大学部	学修課の自己評価 (茶アアンケート調査ではなし)	全学生	毎学期末	10分程度	10分程度	学修到達目標 (ルーブリック) の自己評価	有	可	個人の自動出力分と集計分の分析 (成績はか)	指導改善、カリキュラム・ネジ メン、学位証明補足資料など	学生・教職員	可

①質問項目が多いため、学生の回答の動機付けが低下し、回答の一貫性や安定性などの信頼性に疑問が生じる。

②「質問内容や表現が不明確である」「回答に該当する選択肢がない」「各調査間で質問項目が重複している」などの指摘がある。

③評価基準の尺度にルーブリックを使用していないため、回答の信頼性や客観性に疑問が生じる設問がある。

④共通調査であるため質問項目の具体性が低く、自校の認証評価や支援事業の根拠資料など、短大教育や学生支援の改革・改善に活用できない点が多い。

⑤JCKK 共通調査への参画短大を拡大するために、集計結果の速報性に優れているなど、他の短大生調査との差別化・有用性・利便性が必要である。

⑥認証評価の根拠資料に使用する学務データとリンクさせた分析や解釈が可能になるように考慮する必要がある。

以上の点から、JCKK 共通調査の制度設計について、全体的な見直しの必要性が生じてきた。そこで、JCKK 共通調査の制度設計に先立ち、各短大における学内学生調査の実施状況を把握することにした。

2.3. 各短大における学内学生調査の実施状況

表2は、短大コンソーシアムに加盟する6短大独自の学生調査を集約した一覧表である。なお、授業評価アンケートは、すべての短大においても自己点検・自己評価の一環として実施しているため表2からは除外している。

これら各短大の学内学生調査には、短大コンソーシアムの共通調査の在学調査や卒業生調査のように、短大教育の成果検証やニーズ調査を目的とするものはあまり含まれていない。従って、JCKK 共通調査の結果を短大教育の向上・充実に資する有効なデータとして活用できると言える。

2.4. 共通調査で実施する調査対象と質問領域の選定

表3は、共通調査策定の参考にするために、各短大が学内学生調査で実施している領域と共通調査で実施を希望する領域を集約する一覧表である。表3は2短大のみの回答であるが、2短大ともに共通調査として希望している調査の対象は、短大1年生の在学調査、短大2年生の卒業時調査、卒後2年目と卒後4年目の卒業生調査、就職先調査の5種類である。主な質問領域は、学習行動、学習成果、満足度・総合評価、希望進路、短大教育の有用性、資格等

の必要性、要望事項などである。

本来は、短大コンソーシアム加盟の6短大からの回答を集計し、共通調査が対象とする領域を確定する予定であった。しかし、実際に回答があった短大は2校のみで、他の4短大は選択する領域が漠然としていて回答が困難であるとのことで、データを得ることができなかった。そこで、共通調査で実施を希望する具体的な質問項目について、改めて調査することにした。

2.5. 共通調査で実施する質問項目の選定

表4は、共通調査の在学調査と卒業生調査で実施を希望する具体的な質問項目を集約する一覧表である。この回答については、現在短大コンソーシアム加盟6短大に学内での要望の取りまとめを依頼しており、まだ6短大の要望の集約には至っていない。そこで、今回は筆者が所属する短大の回答のみを提示することとする。短大1年生の在学調査と短大2年生の卒業時調査として実施を希望する主な質問項目は、高校や短大時代の学習行動、学習成果、満足度、要望事項、アルバイトの状況、希望進路、人生設計などに関するものである。

3. 調査スタンダードの制度設計について

3.1. 共通調査の目的の明確化

JCKK 共通調査の短大コンソーシアム・スタンダードを策定するには、共通調査の目的を明確にして、短大間で共有しておく必要がある。

共通調査の目的としては、(1)ステークホルダーへの広報活動や学生募集、認証評価や改革総合支援事業における成果検証の根拠資料として活用する場合と、(2)教育の質の向上・充実・改革・改善の将来構想の根拠資料として活用する場合が考えられる。さらに、後者については次のような具体的な目的が挙げられる。

①各短大の強みと弱みの基準となるベンチマーク（基準値）を設定するため。

②複数の短大の回答を合わせた大量のデータによって、統計的有意性の向上と多様な意見の収集を図るため。

③各短大で実施している学内調査の質問項目を補完するため。

④短大の特色である地域連携や個別支援に関する項目を検証するため。

表3. 共通調査に関する調査領域の希望調査 (長崎女子短大と長崎短大の回答、2018. 12. 16現在)

※各調査の質問領域について、「現状」の欄には現在の各短大の実施状況を「○」かコメントで、「希望」の欄には今後の共通調査で希望する領域に「◎」か「コメント」で記入してください。

※「案」の欄には、今後の共通調査で実施の追加を希望する質問領域を記入してください。

			調査の種類									
			1 入学時調査 (新入生調査)	2 在学生調査 (1年次調査)	3 卒業時調査 (2年次調査)	4 卒業生調査 (卒業後2年目調査)	5 卒業生調査 (卒業後4年目調査)	6 就職先調査	7 高校生調査	8 高校進路 担当者調査		
質問 の 領 域	① 入学前の学習行動 について	現状	○	○								
		希望		◎◎					◎	◎		
		案										
	② 入学の理由につい て	現状	○	○								
		希望		◎◎								
		案										
	③ 現在の学修行動に ついて	現状		○	○							
		希望		◎◎	◎◎				◎	◎		
		案										
	④ 現在の学修成果に ついて	現状	○	○	◎◎	○			○			
		希望		◎◎	◎◎	◎◎	◎◎		◎	◎	◎	
		案										
⑤ 現在の満足度につ いて	現状		○	○	○							
	希望		◎◎	◎◎	◎◎	◎◎						
	案											
⑥ 今後の希望進路、 または現在の職業 等について	現状	○		○	○							
	希望		◎◎	◎◎	◎◎	◎◎		◎	◎	◎		
	案											
⑦ 短大の授業や体験 の必要性・有用性 について	現状			◎◎	○							
	希望			◎◎	◎◎	◎◎		◎◎	◎	◎		
	案											
⑧ 資格等の取得の必 要性・有用性につ いて	現状			◎◎	○							
	希望			◎◎	◎◎	◎◎		◎◎	◎	◎		
	案											
⑨ 希望するライフア ザインについて	現状			○	○							
	希望			◎	◎			◎				
	案											
⑩ 短大の総合評価に ついて	現状		○	◎◎	○			○				
	希望		◎◎	◎◎	◎◎	◎◎		◎◎	◎	◎		
	案											
⑪ 現在の生活状況等 について	現状		○	○	○							
	希望				◎	◎						
	案											
⑫ その他 ()	現状											
	希望											
	案											

⑤質保証モデルを策定し、学習成果の規定要因、アセスメント・ポリシー、カリキュラム・マネジメントを検討する、などである。

3. 2. 共通調査の結果の処理法と活用法の明確化

共通調査の目的と同様に、結果の処理法と活用法についても明確にしておく必要がある。主な処理法と活用法としては、以下の事項が考えられる。

①「測定 (診断)」の段階としては、成果検証、変化量の比較、評価指標の測定・把握をすることである。例えば、a) 学習成果の到達度、b) 学習意欲の高揚度、c) 学生支援の満足度、d) 職業意識の高揚度の測定・把握である。

②「分析 (要因)」の段階としては、関連・相関・因果

関係、規程要因の分析・解釈をすることである。例えば、a) 調査したサンプル (標本) 学生の傾向を測定する「記述統計の平均値などの算出」と、学生全体 (母集団) の傾向を推測する「推測統計の有意水準などの検定」、b) 総合評価の回答 (知人に入学を勧める、もう一度入学する) と各設問の回答との相関、c) 学習成果の到達度、学生支援の満足度、学修時間・学習行動と各設問の回答との重回帰分析やパス解析である。

③「改善 (治療)」の段階としては、教育の改革・改善、向上・充実に活用することである。例えば、a) 一斉支援として、全体的な学生支援 (学習支援・生活支援・進路支援) の改善の根拠資料として活用するなど、b) 個別支援として、休退学者の兆候発見、能力や意欲が異なる学生へ

表4. 共通調査に関する質問項目の希望調査（長崎女子短大の回答、2018. 9. 18現在）

番号	質問項目	1年生の在 学生調査に 関する項目	2年生の卒 業時調査に 関する項目	独自に実施 している項 目	独自に実施 している時 期	共通調査で 実施を希望 する項目	希望する 実施時期
1	高校在籍時の勉強時間（授業外）	○		○	1年次4月	○	1年次2月
2	高校在籍時の学習態度（熱心に取り組んだか）	○		×		×	
3	高校在籍時の学習へ態度・意欲	○		×		○	1年次2月
4	高校在籍時に熱心に取り組んだ内容	○		×		○	1年次2月
5	高校在籍時の進路選択時期	○		○	1年次4月	○	1年次2月
6	自校を知ったきっかけ	○		○	1年次4月	○	1年次2月
7	進学を決めた理由	○		○	1年次4月	○	1年次2月
8	短大生活への期待度	○		×		×	
9	短大入学への満足度（不本意か否か）	○		×		×	
10	1年時の授業への取り組み度合い	○		×		○	1年次2月
11	1年時の授業時間数	○		×		×	
12	1年時の学習やアルバイト、趣味などの日常生活の時間把握	○		×		○	1年次2月
13	1年時の学習へ態度・意欲	○		×		○	1年次2月
14	1年時の授業態度	○		×		○	1年次2月
15	1年時の試験前の勉強への意欲	○		×		×	
16	1年時の成績への自己評価	○		×		×	
17	短大の学生支援への満足度	○	○	×		○	1年次2月
18	教員の指導への満足度	○	○	×		○	1年次2月
19	学生生活サポート体制への満足度	○	○	×		○	1年次2月
20	1年間の学習到達度	○		×		○	1年次2月
21	1年間の学習能力体得の自己評価	○		×		×	
22	卒業後の進路希望（就職意欲）	○		×		○	1年次2月
23	卒業後の希望職種（専門職、公務員など職種）	○		×		○	1年次2月
24	1年間の短大への総合評価	○		×		○	1年次2月
25	アルバイト経験	○		×		×	
26	アルバイトと学習内容の関係（度合い）	○		×		×	
27	アルバイト収入の用途	○		×		×	
28	2年間で熱心に取り組んだ学習内容		○	×		○	2年次2月
29	2年間の授業時間数		○	×		×	
30	2年間の学習やアルバイト、趣味などの日常生活の時間把握		○	×		○	2年次2月
31	2年間の学習へ態度・意欲		○	×		○	2年次2月
32	2年間の授業態度		○	×		○	2年次2月
33	2年間の試験前の勉強への意欲		○	×		×	
34	2年間の成績への自己評価		○	×		×	
35	2年間の成績への満足度		○	×		×	
36	2年間の学習到達度		○	○	2年次2月	○	2年次2月
37	2年間の学習能力体得の自己評価		○	×		×	
38	就職活動内容		○	×		×	
39	進路先（職種など）		○	○	2年次2月	○	2年次2月
40	人生設計や生活設計への考え（方針・希望など）		○	×		×	
41	人生において重視すること		○	×		×	
42	10年後の自分の想定（像）		○	×		×	
43	短大教育の有用性			×		○	2年次2月
44	短大の学生支援への要望			×		○	2年次2月

の動機付けや個別支援の資料として活用する、などである。

質問領域、質問項目、調査対象の制度設計を行った。

3.3. 共通調査の目的別の制度設計

共通調査の対象別の制度設計を行う前に、調査問での質問項目の重複や不足等の問題を避けるために、成果検証やニーズ把握など、共通調査の目的別の制度設計を試みた。

表5は、共通調査の目的別の制度設計である。①ベンチマーク調査では学修の成果検証を目的とし、②総合評価調査は短大教育の有用性の検証を、③ニーズ調査は短大教育へのニーズ把握を、④産官学連携調査では産官への情報提供を目的としている。これらの目的に応じて、それぞれの

3.4. 共通調査の対象別の制度設計

共通調査の目的別の制度設計を参考にして、短大在学生、卒業生、就職先など、調査の対象別の制度設計を行った。

表6は、共通調査の対象別の制度設計である。①在学生調査は短大1年生を対象とし、②卒業時調査は短大2年生を、③卒業生調査は卒業後数年目の卒業生を、④就職先調査は卒業後数年目の就職先を、⑤高校生調査は高校生を調査の対象としている。これらの対象に応じて、それぞれの質問項目、実施年度、実施時期の制度設計を行った。

表 5. 共通調査の目的別の制度設計 (案)

※ () の調査には該当しない質問項目が含まれる。

調査名称 (仮)	調査目的	主な質問領域	主な質問項目	調査対象
①ベンチマーク調査	学修の成果検証	汎用的能力の学修成果、学修実態、学生の PDCA サイクルの状況	学修成果の到達度、到達目標の理解度、学修時間・学修方法、評価基準の理解度、フィードバック・結果の活用	在学生、卒業時、(高校生、卒業生、就職先)
②総合評価調査	短大教育の有用性の検証	学生支援の満足度・短大評価	学生支援の満足度、進学を薦める教育機関、短大教育の総合評価	卒業時、卒業生、(就職先)
③ニーズ調査	短大教育へのニーズ把握	希望進路・有用性・要望、生活実態・職業観・人生設計、プロフィール	役立つ授業・体験・資格・能力等、要望事項、生き方、将来像、個人情報	卒業時、卒業生、(高校生、就職先)
④産官学連携調査	産官への情報提供	産業界と官公庁からの実態調査や意識調査の要望事項の調査	産業界と官公庁からの質問項目の募集	(高校生、在学生、卒業時、卒業生、就職先)

表 6. 共通調査の対象別の制度設計 (案)

※) 実施年度は JCK の事業として実施が確定。

調査名称	調査手法	調査対象	主な質問項目	実施年度※	実施時期
①在学生調査	Web	短大 1 年生	汎用的能力の到達度、学生支援の満足度、学修実態	2019年度以降	11月～1月
②卒業時調査	Web	短大 2 年生	汎用的能力の到達度、学生支援の満足度、学修実態、PDCA サイクルの状況、短大教育の有用性、資格・能力・学習等のニーズ・要望、短大評価、希望進路、人生設計	2019年度以降	1月～3月
③卒業生調査	Web	卒後〇年目の卒業生	汎用的能力の到達度、学生支援の満足度、資格・能力・学習等のニーズ・要望、短大評価、人生設計、生活実態	2020年度以降	〇月～〇月
④就職先調査	質問紙	卒後〇年目の就職先	汎用的能力の到達度の把握、短大評価、資格・能力・学習等のニーズ・要望	2020年度以降	11月～1月
⑤高校生調査	質問紙	高校〇年生	高校卒業後の希望進路、汎用的能力、学修実態、資格・能力・学習等のニーズ・要望、希望進路	2020年度以降	随時

質問項目の作成では、上述の目的別と対象別の両方の制度設計を念頭に入れて質問と選択肢の改定を試みた。

3. 5. 質問項目の作成上の留意点

質問項目の作成に当たっては、陥りやすい誤りがあり、調査の目的を十分達成できない場合があるため、以下に質問項目の作成上の留意点を整理した。

(1)質問項目の明確化： 質問の趣旨や選択肢の意味を明確にし、カテゴリーの分類を選定する。

(2)質問項目の簡潔化： 質問の数を少なくし、文章を短くして、スマートフォンに最適な質問項目にする。

(3)学務データとリンクさせた分析や解釈が可能になるように考慮する。

(4)妥当性 (的確性)、信頼性 (一貫性・安定性)、能力測定の客観性を検討する。

(5)質問項目の作成の際の具体的な留意点を示す。

- ①質問のカテゴリーの分類と選定(目的に合っている)
- ②質問に適した回答形式の選定 (回答しやすい方法)
- ③質問の信頼性・一貫性の検討(回答が安定している)

④質問の妥当性・的確性の検討(的外れの内容でない)

⑤質問の不適切要因の排除(回答の信憑性が低くない)

a) 1文で2つ以上のことを尋ねている (ダブルバレル、二連続)。b) 抽象的で人によって異なる解釈をしてしまう表現が含まれている。c) 特定の特性や経験・知識のある人しか回答できない内容になっている。

⑥メンタルヘルスの問題は扱わないことを周知する。

3. 6. 在学生調査と卒業時調査の質問項目 (案)

補足資料 (表 7 と表 8) は、2018年度用として改定した在学生調査と卒業時調査の質問項目である。従来の質問が A 4 判 10 頁分であったのに対して、約半分の 5 頁に分量を削減している。また、不明確な質問項目や選択肢の表現を修正している。

ただし、これらの質問項目や選択肢には、まだ修正の余地が多く残されているため、継続的な見直しが必要である。

4. まとめ

4.1. 総括

本稿は、短大教育の改革・改善、向上・充実の根拠となる情報を得るために、短大コンソーシアム九州が実施する共通調査の手法について、標準化した調査スタンダードの制度設計を行うことを目的とした。

具体的には、過去15年間のJCCK 共通調査の実施状況や各短大の学内学生調査の実施状況、および希望する調査対象・質問領域・質問項目を集約し、共通調査の目的別と対象別の制度設計について提案した。

これにより、①在学生調査、②卒業時調査、③卒業生調査、④就職先調査、⑤高校生調査について、調査目的、調査対象、調査手法、質問領域、質問項目、実施年度・実施時期を一体的・体系的に示すことができた。

4.2. 今後の課題

今後の調査スタンダードの制度設計における課題としては、以下の点が挙げられる。

- ①質問項目とアセスメント・ポリシーの確立
- ②カリキュラム・マネジメントへの活用法の開発
- ③可視化作業の効率化と体制化（人的負担の軽減）
- ④ IR システムの可視化機能の向上、などである。

以上の点を踏まえて、今後も短大教育の改革・改善に資する有効なデータの収集と分析に取り組んでいきたい。

参 考 文 献

- (1) 安部恵美子 (2014) 「短期大学間の連携・共同による教育の展開—短期大学コンソーシアム九州の事例—」中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学 WG (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/037/siryo/_icsFiles/afiedfile/2014/03/07/1343984_3.pdf)
- (2) 安部恵美子、南里悦史 (編) (2018) 『短期大学の教育の新たな地平』北樹出版

表 7. 2018年度の在学生調査の質問項目

1. 高校での学習行動について

質問 1：高校等在籍時代の授業期間中、授業以外で勉強に費やした 1 週間の合計時間はどのくらいでしたか。（「塾」等を含む）

- ①全くしなかった、②若干～1 時間未満、③1～5 時間未満、④5～10 時間未満、⑤10～20 時間未満、⑥20～30 時間未満、⑦30 時間以上

質問 2：高校等在籍時代、あなたは次の学習について、どのくらい熱心に取り組んでいましたか。5 段階で評価してください。

- ①全く熱心に取り組まなかった、②、③、④、⑤非常に熱心に取り組んだ
- 授業への出席
 - 宿題
 - テスト前の勉強
 - 予習・復習等の家庭学習

質問 3：高校等在籍時代の学習内容について、あなたはどのように考えていましたか。5 段階で評価してください。

- ①全くそう思わない、②、③、④、⑤非常にそう思う
- 高校の勉強はおもしろかった
 - 高校の勉強は将来に役に立つと思っていた
 - 何のために勉強するのか十分に理解できた

質問 4：高校等在籍時代、あなたは次の活動について、どのくらい熱心に取り組んでいましたか。5 段階で評価してください。

- ①全く熱心に取り組まなかった、②、③、④、⑤非常に熱心に取り組んだ
- 授業に関係する勉強
 - 授業とは関係ない勉強
 - 実習やインターンシップ等、職場での学びの体験
 - クラブ活動や部活動
 - ボランティア活動
 - アルバイト
 - 友達との交際
 - 趣味
 - その他（ ）

2. 短大への入学について

質問 5：昨年の 8、9 月頃に考えていた第一希望の進路先はどこでしたか。「その他」を選択した人は希望していた進路を具体的に記載してください。

- 本学への進学
- 他の短大への進学
- 四年制大学への進学
- 専門学校・各種学校
- 就職
- まだ迷っていた
- その他（ ）

質問 6：本学をどのような方法で知りましたか。（複数回答可）

- 本学のホームページ
- 本学の学校案内パンフレット
- 進学情報サイト
- 受験雑誌
- 高校の先生（進路相談・進路ガイダンス）
- 家族・親戚の紹介
- 先輩・知人の紹介
- 本学出身者・本学通学者が周りにいた
- 同じ系列・附属の高校出身
- 本学のオープンキャンパス（高校生が短大を訪問）
- 本学の見学会・訪問（高校生が短大を訪問）
- 学校説明会（高校生がホテルの会場などを訪問）

- m. 高校訪問キャラバン隊（短大生が高校を訪問）
- n. 短大フェス（複数の短大による合同学園祭）

質問7： 本学への進学を決めた理由として、あなたは次の項目をどの程度重要と考えましたか。4段階で評価してください。

- ①全く重要でない、②、③、④非常に重要である
- a. 学びたい分野がある
 - b. 取得したい資格が取れる
 - c. 教養を身に付ける
 - d. 就職に有利
 - e. 早く社会に出る
 - f. 大学編入制度
 - g. 専攻科
 - h. 校風の良さ
 - i. 立地や施設設備の良さ
 - j. 自宅通学可能
 - k. 自分の学力に合う
 - l. 高卒で働きたくない
 - m. 親（家族）の勧め
 - n. 高校の先生の勧め
 - o. 先輩や友達の勧め
 - p. 学費が適当
 - q. 奨学金の支給
 - r. 推薦入試などでの早くの合格
 - s. （新規）高校訪問キャラバン隊の印象（短大生が高校を訪問）
 - t. （新規）短大フェスの印象（複数の短大による合同学園祭）

質問8： 短大入学前、あなたは以下の短大生活のことについてどのくらい期待していましたか。次の4段階で評価してください。

- ①全く期待しなかった、②、③、④とても期待した
- a. 興味ある分野の勉強
 - b. 将来の職業に役立つ勉強
 - c. 人として教養を深めること
 - d. 良い先生との出会い
 - e. 新しい友達との出会い
 - f. 自由な雰囲気
 - g. ボランティア活動
 - h. サークル・クラブ・部活動等での活躍
 - i. アルバイト
 - j. 趣味等の活動
 - k. 一人暮らし

質問9： 本学は第1希望の短大でしたか。

- ①はい、②いいえ

3. 短大1年間の学習行動について

質問10： 1年間の授業期間中、あなたは次の活動について、どのくらい熱心に取り組んでいましたか。5段階で評価してください。

- ①全く熱心に取り組まなかった、②、③、④、⑤非常に熱心に取り組んだ
- a. 授業に関係する勉強
 - b. 授業とは関係ない勉強
 - c. 実習やインターンシップ等、職場での学びの体験
 - d. クラブ活動や部活動
 - e. ボランティア活動
 - f. アルバイト
 - g. 友達との交際
 - h. 趣味

i. その他 ()

質問11：1年間の授業期間中、あなたが熱心に取り組んだ学習（授業科目や免許・資格・検定の取得、体験学習など）の名称を入力してください。（5つまで回答可）

質問12：1年間の授業期間中、授業の出席に費やした1週間の合計時間はどのくらいでしたか。平均的な1週間の思い出して1番近いものを選んでください。（授業出席時間：1コマ90分で週10コマの場合15時間など）

- ①0～15時間未満、②15～20時間未満、③20～25時間未満、④25～30時間未満、⑤30～35時間未満、⑥35時間以上

質問13：1年間の授業期間中、次の活動に費やした1週間の合計時間はどのくらいでしたか。

- ①全くしなかった、②若干～1時間未満、③1～5時間未満、④5～10時間未満、⑤10～20時間未満、⑥20～30時間未満、⑦30時間以上
- a. 授業以外の勉強や宿題
 - b. 実習やインターンシップ等、職場での就業体験
 - c. 授業以外での教員との会話
 - d. サークル・クラブ・部活動
 - e. ボランティア活動
 - f. アルバイト
 - g. 友人との交際
 - h. インターネットを通しての友人との交流
 - i. 趣味としての運動やスポーツ
 - j. 趣味としての読書
 - k. テレビやパソコンでのゲーム遊び
 - l. テレビを見る
 - m. 家事手伝い

質問14：1年間の授業期間中、あなたは以下の学習への取り組みをどのくらいしましたか。5段階で評価してください。

- ①全くしなかった、②、③、④、⑤日常的にした
- a. 授業に出席する
 - b. 授業中、教員の質問に答えたり、意見を述べたりする
 - c. 授業中以外に教員とコミュニケーションをとる
 - d. ノートのとり方を工夫する
 - e. 授業での配布資料・プリントを整理する
 - f. 教科書以外に参考文献などを読む
 - g. 辞書・電子辞書を活用する
 - h. 図書館を利用する
 - i. インターネットを活用する
 - j. 授業の課題をきちんと提出する
 - k. 授業の予習・復習をする

質問15：1年間の授業期間中、あなたの以下の学習態度はどうでしたか。5段階で評価して下さい。

- ①全くしなかった、②、③、④、⑤日常的にした
- a. 授業への遅刻
 - b. 授業中の私語
 - c. 授業中の携帯電話やメールの使用
 - d. アルバイトでの授業欠席
 - e. サークルや趣味活動での授業欠席

質問16：授業の試験前、あなたはどのように学習へ取り組みましたか。5段階で評価してください。

- ①全くしなかった、②、③、④、⑤一生懸命した

質問17：短大1年間の在学中の自分の成績はどの程度だと思いますか。5段階で評価してください。

- ①下位、②下位～中位、③中位、④中位～高位、⑤高位

質問18：短大1年間の在学中の自分の成績について、あなたはどのように思いますか。5段階で評価してください。

①全く満足しなかった、②、③、④、⑤非常に満足した

4. 短大1年間の学生支援の満足度について

質問19：1年間の本学での教育を振り返ってみて、「授業内容・方法」についてあなたはどのくらい満足していますか。5段階で評価してください。

①全く満足しなかった、②、③、④、⑤非常に満足

- | | | |
|---------------------|-------------------------|-----------------|
| a. 選択できる授業の多様性 | d. 実践（職業）で役立つ実学性重視の授業 | g. 授業方法に工夫がある授業 |
| b. 豊かな教養を身に着ける授業 | e. 学外体験（実習やインターンシップ）の機会 | h. 参加意識が持てる授業 |
| c. 専門的知識や技術を身につける授業 | f. わかりやすい授業 | i. 私語のない授業 |

質問20：1年間の本学での教育を振り返ってみて、「教員の指導」についてあなたはどのくらい満足していますか。5段階で評価してください。

①全く満足しなかった、②、③、④、⑤非常に満足

- | | |
|-------------------------------|-------------------|
| a. 科目履修に関する助言や指導 | d. 教員の専門分野に触れる機会 |
| b. 就職や編入学など進路選択の励まし | e. 精神的なケアや励まし |
| c. ノートの取り方や試験への取り組みについてのアドバイス | f. 授業以外で教員と交流する機会 |

質問21：1年間の本学での教育を振り返ってみて、「学生生活のサポート体制」についてあなたはどのくらい満足していますか。5段階で評価してください。

①全く満足しなかった、②、③、④、⑤非常に満足

- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| a. 就職・進路支援の体制 | c. 部活・サークル・イベントなど学生同士の交流の機会 |
| b. 進路や悩みなどを気軽に相談できる体制 | d. 図書館や情報設備 |

5. 短大1年間の学習成果の到達度について

質問22：あなたの、以下の知識・技能・態度を5段階で評価してください。

①とても劣っている、②、③、④、⑤大変優れている

- | | | |
|--------------------|------------------------|----------------|
| a. 学問に対する興味関心 | f. 多様なものの見方を知って受け入れること | k. リーダーシップ |
| b. 専門的な知識や技能 | g. 社会の現実的問題への関心 | l. 自分で考え、行動する力 |
| c. 幅広い知識や教養 | h. 一般的な常識や礼儀・マナー | m. 最後までやりぬく力 |
| d. 職業や進路選択への方向づけ | i. 人とのコミュニケーション能力 | n. 自分に対する自信 |
| e. ひとつの問題を深く探究する態度 | j. チームで仕事をする力 | |

質問23：短大1年間の在学中に以下の学習能力がどの程度身についたと思いますか。5段階で評価してください。

①ひどく低下した、②、③、④、⑤とても高まった

- | | | |
|------------|----------------|-----------------------------------|
| a. 文章表現の能力 | c. 情報収集能力 | e. コンピュータ（WordやExcelの使い方を含む）やインター |
| b. 数理的な能力 | d. プレゼンテーション能力 | ネットの活用方法 |

6. 短大1年間の総合評価について

質問24：本学での1年間の学生生活にどれくらい満足していますか。5段階で総合的に評価してください。

①全く満足していない、②、③、④、⑤非常に満足している

質問25：1年間の学生生活を振り返って、本学に対する感想・意見・要望等について、何でも自由に書いてください。

7. 将来の生活について

質問26：卒業後にあなたが希望する進路はどれですか。次の中から一つだけ選択してください。

- 正規の職員として就職する → 質問27
- 自営業・家業に就く → 質問27
- 契約・派遣などの社員として就職する → 質問27
- 短大専攻科に進学する → 質問28
- 四年制大学に編入・進学する → 質問28
- 専門学校に進学する → 質問28
- 留学する → 質問28
- パートタイム・臨時の仕事に就く → 質問28
- 職業訓練を受ける → 質問29

- j. 家事・子育てに専念する → 質問29
 k. その他 ()

質問27：卒業後にあなたが希望する職業の職業・職種は何ですか。次の中から一つだけ選択してください。前項で「a. 正規の職員…」 「b. 自営業・家業…」 「c. 契約・派遣社員…」 を選んだ方のみ答えてください。

- a. 専門技術的職業従事者（保育士、幼稚園教諭、栄養士、介護福祉士など）
 b. 公務員
 c. 事務従事者（医療事務を含む）
 d. 販売従事者
 e. サービス職業従事者
 f. 保安職業従事者
 g. 農林漁業作業者
 h. 運輸・通信従事者
 i. 生産工程・労務作業従事者
 j. その他 ()

質問28：卒業後にあなたが就職する勤務地はどこですか。次の中から一つだけ選択してください。

- a. 地元の自宅通勤可能な範囲
 b. 地元の県内（aでない人）
 c. 九州北部地区の3県内（福岡県内、佐賀県内、長崎県内）（aとbでない人）
 d. 希望勤務地の地道府県名（全員） ()

8. 短大1年間の生活状況等について

質問29：在学中にアルバイトをしたことはありますか。

- ①ある → 質問30
 ②ない → 質問32

質問30：短大の学習内容とアルバイトの仕事は、どのくらい関係がありましたか。前項でアルバイトをしていたことが「ある」と回答した方は、5段階で評価してください。

- ①全く関係ない、②、③、④、⑤大いに関係ある

質問31：アルバイトで得た収入の使いみちは何でしたか。前項でアルバイトをしていたことが「ある」と回答した方は、以下の中から該当するものすべてを選んでください。（複数回答可）

- a. 授業料・実習費などの学納金
 b. 生活費
 c. 交通費（自家用車諸経費含む）
 d. 通信費（携帯電話代含む）
 e. 交際費
 f. 服飾費（洋服代等）
 g. 預貯金

9. 最後に

質問32：次の項目について、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- ①はい、②いいえ
 a. 私は、これまでの人生で一度も後悔したことがない。
 b. 私は、誰にも言えないようなことを一度も想像したことがない。
 c. 私は、生まれてからこれまで一度も嘘をついたことがない。
 d. 私は、このアンケート調査に正直に回答することができた。

以上

表 8. 2018年度の卒業時調査の質問項目

1. 短大2年間の学習行動について

質問1：2年間の授業期間中、あなたは次の活動について、どのくらい熱心に取り組んでいましたか。5段階で評価してください。

- ①全く熱心に取り組まなかった、②、③、④、⑤非常に熱心に取り組んだ
- a. 授業に関係する勉強
 - b. 授業とは関係ない勉強
 - c. 実習やインターンシップ等、職場での学びの体験
 - d. クラブ活動や部活動
 - e. ボランティア活動
 - f. アルバイト
 - g. 友達との交際
 - h. 趣味
 - i. その他 ()

質問2：2年間の授業期間中、あなたが熱心に取り組んだ学習（授業科目や免許・資格・検定の取得、体験学習など）の名称を入力してください。（5つまで回答可）

質問3：2年間の授業期間中、授業の出席に費やした1週間の合計時間はどのくらいでしたか。平均的な1週間を思い出して1番近いものを選んでください。（授業出席時間：1コマ90分で週10コマの場合15時間など）

- ①0～15時間未満、②15～20時間未満、③20～25時間未満、④25～30時間未満、⑤30～35時間未満、⑥35時間以上

質問4：2年間の授業期間中、次の活動に費やした1週間の合計時間はどのくらいでしたか。平均的な1週間を思い出して、一番近いものを選んでください。

- ①全くしなかった、②若干～1時間未満、③1～5時間未満、④5～10時間未満、⑤10～20時間未満、⑥20～30時間未満、⑦30時間以上
- a. 授業以外の勉強や宿題
 - b. 実習やインターンシップ等、職場での就業体験
 - c. 授業以外での教員との会話
 - d. サークル・クラブ・部活動
 - e. ボランティア活動
 - f. アルバイト
 - g. 友人との交際
 - h. インターネットを通しての友人との交流
 - i. 趣味としての運動やスポーツ
 - j. 趣味としての読書
 - k. テレビやパソコンでのゲーム遊び
 - l. テレビを見る
 - m. 家事手伝い

質問5：2年間の授業期間中、あなたは以下の学習への取り組みをどのくらいしましたか。5段階で評価してください。

- ①全くしなかった、②、③、④、⑤日常的にした
- a. 授業に出席する
 - b. 授業中、教員の質問に答えたり、意見を述べたりする
 - c. 授業中以外に教員とコミュニケーションをとる
 - d. ノートのとり方を工夫する
 - e. 授業での配布資料・プリントを整理する
 - f. 教科書以外に参考文献などを読む
 - g. 辞書・電子辞書を活用する
 - h. 図書館を利用する
 - i. インターネットを活用する
 - j. 授業の課題をきちんと提出する
 - k. 授業の予習・復習をする

質問6：2年間の授業期間中、あなたの以下の学習態度はどうでしたか。5段階で評価して下さい。

- ①全くしなかった、②、③、④、⑤日常的にした

- a. 授業への遅刻
- b. 授業中の私語
- c. 授業中の携帯電話やメールの使用
- d. アルバイトでの授業欠席
- e. サークルや趣味活動での授業欠席

質問7：授業の試験前、あなたはどのように学習へ取り組みましたか。5段階で評価してください。

- ①全くしなかった、②、③、④、⑤一生懸命した

質問8：短大2年間の在学中の自分の成績はどの程度だと思いますか。5段階で評価してください。

- ①下位、②下位～中位、③中位、④中位～高位、⑤高位

質問9：短大2年間の在学中の自分の成績について、あなたはどのように思いますか。5段階で評価してください。

- ①全く満足しなかった、②、③、④、⑤非常に満足した

2. 短大2年間の学生支援の満足度について

質問10：2年間の本学での教育を振り返ってみて、「授業内容・方法」についてあなたはどのくらい満足していますか。5段階で評価してください。

- ①全く満足しなかった、②、③、④、⑤非常に満足

- | | | |
|---------------------|-------------------------|-----------------|
| a. 選択できる授業の多様性 | d. 実践（職業）で役立つ実学性重視の授業 | g. 授業方法に工夫がある授業 |
| b. 豊かな教養を身に着ける授業 | e. 学外体験（実習やインターンシップ）の機会 | h. 参加意識が持てる授業 |
| c. 専門的知識や技術を身につける授業 | f. わかりやすい授業 | i. 私語のない授業 |

質問11：2年間の本学での教育を振り返ってみて、「教員の指導」についてあなたはどのくらい満足していますか。5段階で評価してください。

- ①全く満足しなかった、②、③、④、⑤非常に満足

- | | |
|-------------------------------|-------------------|
| a. 科目履修に関する助言や指導 | d. 教員の専門分野に触れる機会 |
| b. 就職や編入学など進路選択の励まし | e. 精神的なケアや励まし |
| c. ノートの取り方や試験への取り組みについてのアドバイス | f. 授業以外で教員と交流する機会 |

質問12：2年間の本学での教育を振り返ってみて、「学生生活のサポート体制」についてあなたはどのくらい満足していますか。5段階で評価してください。

- ①全く満足しなかった、②、③、④、⑤非常に満足

- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| a. 就職・進路支援の体制 | c. 部活・サークル・イベントなど学生同士の交流の機会 |
| b. 進路や悩みなどを気軽に相談できる体制 | d. 図書館や情報設備 |

3. 短大2年間の学習成果の到達度について

質問13：あなたの、以下の知識・技能・態度を5段階で評価してください。

- ①とても劣っている、②、③、④、⑤大変優れている

- | | | |
|--------------------|------------------------|----------------|
| a. 学問に対する興味関心 | f. 多様なものの見方を知って受け入れること | k. リーダーシップ |
| b. 専門的な知識や技能 | g. 社会の現実的問題への関心 | l. 自分で考え、行動する力 |
| c. 幅広い知識や教養 | h. 一般的な常識や礼儀・マナー | m. 最後までやりぬく力 |
| d. 職業や進路選択への方向づけ | i. 人とのコミュニケーション能力 | n. 自分に対する自信 |
| e. ひとつの問題を深く探究する態度 | j. チームで仕事をする力 | |

質問14：短大2年間の在学中に以下の学習能力がどの程度身についたと思いますか。5段階で評価してください。

- ①ひどく低下した、②、③、④、⑤とても高まった

- | | | |
|------------|----------------|-------------------------------------------|
| a. 文章表現の能力 | c. 情報収集能力 | e. コンピュータ（WordやExcelの使い方を含む）やインターネットの活用方法 |
| b. 数理的な能力 | d. プレゼンテーション能力 | |

4. 将来の生活について

質問15：短大在学中にどのような就職活動をしましたか。あてはまるもの全てについて選択してください。また、就職活動も進学・留学に向けた活動も行わなかった人は、「その他」でお答えください。（複数選択可）

- a. 短大の就職課や就職情報室を利用した

- b. 短大の先生に相談した
- c. 施設や企業から誘いを受けた
- d. 求人情報誌・広告やインターネット等を見て応募した
- e. 公共や民間の職業紹介機関を利用した
- f. 在学中の仕事（アルバイト・実習等）で関係を作った 7 個人的な“つて”（親、親戚、友達、先輩等）を頼った
- g. 自分で企業を起こした、自営を始めた
- h. 進学・留学を希望している
- i. その他（ ）

質問16：進路は決定していますか。

- ①決定している → 質問17
- ②決定していない → 質問20

質問17：進路先について教えてください。

- a. 正規の職員として就職する → 質問18
- b. 自営業・家業に就く → 質問18
- c. 契約・派遣などの社員として就職する → 質問18
- d. 短大専攻科に進学する → 質問20
- e. 四年制大学に編入・進学する → 質問20
- f. 専門学校に進学する → 質問20
- g. 留学する → 質問20
- h. パートタイム・臨時の仕事に就く → 質問20
- i. 職業訓練を受ける → 質問20
- j. 家事・子育てに専念する → 質問20
- k. その他（ ） → 質問20

質問18：卒業後にあなたが就く予定の職業・職種は何ですか。前項で「1. 正規職員…」「2. 自営業・稼業…」「3. 契約・派遣社員…」のいずれかを選び、「就職する」と答えた方のみお答えください。

- a. 専門技術的職業従事者（保育士、幼稚園教諭、栄養士、介護福祉士など）
- b. 公務員
- c. 事務従事者（医療事務を含む）
- d. 販売従事者 → 質問20
- e. サービス職業従事者 → 質問20
- f. 保安職業従事者 → 質問20
- g. 農林漁業作業員 → 質問20
- h. 運輸・通信従事者 → 質問20
- i. 生産工程・労務作業従事者 → 質問20
- j. その他（ ）

質問19（新規）：卒業後にあなたが就職する職業の勤務地はどこですか。次の中から一つだけ選択してください。前項で「a. 正規の職員…」「b. 自営業・稼業…」「c. 契約・派遣社員…」を選んだ方のみお答えください。

- a. 地元の自宅通勤可能な範囲
- b. 地元の県内（aでない人）
- c. 九州北部地区の3県内（福岡県内、佐賀県内、長崎県内）（aとbでない人）
- d. 希望勤務地の地道府県名（全員）（ ）
- e. 決まっていない

質問20：卒業後にあなたが仕事を選ぶ上で、以下の各項目をどの程度重視しますか。5段階で評価してください

- ①全く重視しない、②、③、④、⑤非常に重視する
- a. 短大や進学先で得た知識・技能の活用
- b. 自分の適性を活かす機会
- c. 社会に役立つ機会
- d. 地元で働けること
- e. 男女差別がないこと

- f. 余暇のためのゆとり
- g. 仕事と家庭の両立
- h. 高い収入
- i. 雇用と身分の保障
- j. 社会的な評価
- k. 昇進の見通し
- l. 職場の雰囲気の良さ

質問21：あなたは、望ましい女性の生き方についてどう考えていますか。次の中から最も近いものを一つだけ選択してください。

- a. 結婚しないで仕事を続ける
- b. 結婚や出産にかかわらず仕事を続ける
- c. 結婚や出産時に仕事を辞めるが、子どもが一定の年齢になったら再び仕事に就く
- d. 結婚や出産時に仕事を辞める
- e. 仕事に就かないで結婚し、子どもが一定の年齢になったら仕事に就く
- f. 仕事に就かないで結婚する
- g. その他 ()

質問22：あなたは、望ましい男性の生き方についてどう考えていますか。次の中から最も近いものを一つだけ選択してください。

- a. 結婚しないで仕事を続ける
- b. 結婚や出産にかかわらず仕事を続ける
- c. 結婚や出産時に仕事を辞めるが、子どもが一定の年齢になったら再び仕事に就く
- d. 結婚や出産時に仕事を辞める
- e. 仕事に就かないで結婚し、子どもが一定の年齢になったら仕事に就く
- f. 仕事に就かないで結婚する
- g. その他 ()

質問23：あなたが、人生において最も重視していることは何ですか。5段階で評価してください。

①全く重視しない、②、③、④、⑤非常に重視する

- a. 仕事での成功
- b. 豊かな経済力
- c. 家族や身近な人の生活
- d. 社会や他人への奉仕
- e. 社会的な地位
- f. 趣味やスポーツ活動
- g. 楽しい毎日の生活
- h. 健康であること
- i. その他 ()

質問24：10年後のあなたの仕事や家庭はどのようなものか、想像して書いてください。

5. 短大2年間の総合評価について

質問25：短大で学んだことや体験したことの中で、特にこれから役に立ちそうなことには何ですか。

質問26：短大で学ばなかったことや体験しなかったことの中で、特にこれから学んだり体験したりしたいことは何ですか。

質問27：次のどの進路を後輩や知人に勧めますか

- a. 同じ短大
- b. 別の短大
- c. 専門学校
- d. 四年制大学
- e. 就職
- f. その他 ()

質問28：次のどの専門分野を後輩や知人に勧めますか

- a. 自分と同じ専門分野
- b. 自分と違う専門分野
- c. その他 ()

質問29： 本学での2年間の学生生活にどれくらい満足していますか。5段階で総合的に評価してください。

- ①全く満足していない、②、③、④、⑤非常に満足している

質問30： 2年間の学生生活を振り返って、本学に対する感想・意見・要望等について、何でも自由に書いてください。

6. 短大2年間の生活状況等について

質問31： 在学中にアルバイトをしたことはありますか。

- ①ある → 質問32
②ない → 質問34

質問32： 短大の学習内容とアルバイトの仕事は、どのくらい関係がありましたか。前項でアルバイトをしていたことが「ある」と回答した方は、5段階で評価してください。

- ①全く関係ない、②、③、④、⑤大いに関係ある

質問33： アルバイトで得た収入の使いみちは何でしたか。前項でアルバイトをしていたことが「ある」と回答した方は、以下の中から該当するものすべてを選んでください。(複数回答可)

- a. 授業料・実習費などの学納金
- b. 生活費
- c. 交通費 (自家用車諸経費む)
- d. 通信費 (携帯電話代含む)
- e. 交際費
- f. 服飾費 (洋服代等)
- g. 預貯金

6. 最後に

質問34： 次の項目について、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- ①はい、②いいえ
- a. 私は、これまでの人生で一度も後悔したことがない。
 - b. 私は、誰にも言えないようなことを一度も想像したことがない。
 - c. 私は、生まれてからこれまで一度も嘘をついたことがない。
 - d. 私は、このアンケート調査に正直に回答することができた。

以 上

短期大学コンソーシアム九州関係者の調査・研究活動の記録

1. 外部資金研究費等の獲得状況（令和元年度）

●科学研究費助成事業

- (1) **新たな行動指標の確立—瞬きが映す主体の認知プロセス—**
補助事業期間：平成29年度～令和元年度
研究種目： 科研費 挑戦的研究（萌芽）
代表者： 村井千寿子

- (2) **NHK「みんなのうた」を中心とした日本児童音楽文化の変遷に関する歴史社会学的研究**
補助事業期間：平成30年度～令和2年度
研究種目： 若手研究
代表者： 佐藤慶治

- (3) **リテラシーの向上を目的とした多読授業の実践研究**
（副題）（内発的動機付けを支援する読書活動とその効果）
補助事業期間：令和元年度
研究種目： 女性研究者奨励金
代表者： 岩崎千恵

- (4) **乳幼児期における他児との笑い合いの発生プロセスの解明**
補助事業期間：令和元年度
研究種目： 若手研究者奨励金
代表者： 藤野正和

●委託研究等

- (1) **特定非営利活動法人日本栄養改善学会委託事業（厚生労働省令和元年度管理栄養士専門分野別人材育成事業「教育養成領域での人材育成」「管理栄養士・栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラム」の効果的な活用方法に関する検討実施施設）**
補助事業期間：令和元年度
研究種目： 委託研究
代表者： 平田孝治（福元裕二）

- (2) **発達障害児の二次障害予防プログラム**
補助事業期間：平成29年度採択（継続）
研究種目： 文部科学省私立大学研究ブランディング事業
代表者： 川邊浩史

- (3) **令和元年度 江北町健康ポイント事業（佐賀県杵島郡江北町）**
補助事業期間：令和元年度
研究種目： 受託研究
代表者： 吉村浩美（福元裕二）

2. 各短大業績一覧

◎長崎短期大学

『長崎短期大学 研究紀要』(第31号、平成31年3月)

【論文】

- 1) 藤島法仁「住民主体による支援を開発する意義に関する検討」(1-8頁)
- 2) 市瀬尚子/平田安喜子「新商品開発活動がもたらす教育効果について(松浦市菓子店とのコラボ商品)」(9-15頁)
- 3) 青木萌「朱徳熙(1982)の主語と目的語の関係について」(17-28頁)
- 4) 章潔/小嶋栄子「日中日本語教育の比較研究(4)」(29-39頁)
- 5) 張逸芝「清末における漢語教材の西洋童話についての考察—『華英文義津逮』を中心として—」(41-47頁)
- 6) 福元美和子/小嶋栄子「日本語教科書におけるローマ字綴りに注目して—明治初期のある3冊について—」(49-57頁)

【研究ノート】

- 7) 西田江里/外尾亜利殊/小玉智幸/大河内友美/馬場智子/林田美鳥「地域食育活動の企画・実施が栄養士養成課程在学生の学習意欲および社会人基礎力におよぼす影響」(59-63頁)

【報告】

- 8) 安部恵美子「『2020年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)』と地方の短期大学」(65-76頁)
- 9) 友廣憲子「第34回幼児のための『音楽と動きのつどい』～学生・観客のアンケート調査より～」(77-83頁)
- 10) 大河内友美/小玉智章/外尾亜利殊/馬場智子/西田江里/平田安喜子「夏期休暇中に行った後期復学予定者への学習支援活動」(85-88頁)
- 11) 牟田美信/岩崎千恵「実践『グローバルリーダーシップ in ミャンマー』～活躍する社会人となるために～」(89-95頁)
- 12) 青木萌「国際コミュニケーション学科・中国語教育への新たなチャレンジ—より効果的な中国語教育の取組みと新たな中国留学システムの確立—」(97-101頁)
- 13) 障内智子/陣内敦「絵画制作と朗読の実践研究～紙芝居活動の報告～」(103-111頁)

◎長崎女子短期大学

『長崎女子短期大学紀要』(第43号、2019年3月)

- 1) 長尾久美子「介護福祉士養成教育を振り返って」(1-4頁)
- 2) 織田芳人「幼児教育におけるメディア活用に関する国内の研究概観—保育者によるメディア活用—」(5-11頁)
- 3) 松尾公則「長崎女子短大敷地内の両生爬虫類相」(12-18頁)
- 4) 島田幸一郎/荒木正平「障害のある子ども、気になる子どもの教育・保育的支援ニーズへの配慮について～学生の実習後アンケートの分析をとおして～」(19-29頁)
- 5) 中村浩美「領域『表現』における音楽指導<『保育と音楽表現』の授業報告と主に『手作り手遊び歌』について2>」(30-64頁)
- 6) 本村弥寿子「『保育・教職実践演習』の取り組みについての一考察」(65-70頁)
- 7) 本村弥寿子「保育指導案作成の理解を深めるための取り組みについて—附属幼稚園における体験学習の充実に向けて—」(71-76頁)
- 8) 荒木正平「『子育ての社会化』をめぐる現状認識に関する一考察(2)—学生レポートとアンケートの結果から—」(77-87頁)
- 9) 光武きよみ「領域『健康』の指導法についての研究～園児への手洗い指導に向けて:準備から保健指導実施・事後イ

ンタビュー〜」(88-95頁)

- 10) 光武きよみ「領域「健康」の指導法についての研究～保育学生によるブラッシング指導～」(96-103頁)
- 11) 光武きよみ「保育におけるリスクマネジメントに関する研究～「子どもの安全」研修におけるアンケート調査結果から～」(104-111頁)
- 12) 光武きよみ「学外実習における養護技術の課題について」(112-118頁)
- 13) 山本尚史「実習後における学生の幼児教育者・保育者像に関する予備的考察～「省察的実践」という言葉を基盤に～」(119-123頁)
- 14) 山本尚史「保育における保育者の共通理解と「協働性」についての予備的考察」(124-128頁)
- 15) 昆正子「本学造形表現系科目からみる領域「表現」の学習成果(1)―学生の創作「自己紹介絵本」の教育・保育実習における活用事例から―」(129-143頁)
- 16) 蛭原正貴「鉄棒を使った運動遊びの導入における有効なアナログの検討」(144-149頁)
- 17) 船勢肇「幼稚園教育要領における領域「言葉」についての一考察～子どもの言葉の獲得に着目して～」(150-159頁)
- 18) 船勢肇「大阪における保育者研修の実態に関する一考察」(160-171頁)
- 19) 船勢肇「堺市における幼児教育・保育行政の取り組みの現状と課題についての一考察～待機児童の取り組みを事例に～」(172-181頁)
- 20) 橋口亮／山口ゆかり「トランスグルタミンアゼ製剤の添加がクジラ肉のソーセージパテに及ぼす効果について(第4報)」(182-184頁)
- 21) 古賀克彦「普茶料理に関する考察(普茶料理と長崎の関係について)」(185-190頁)
- 22) 森弘行「学習支援システムの試作(3)」(191-194頁)
- 23) 武藤玲路「長崎女子短期大学における3つの方針の検証」(195-200頁)
- 24) 濱口なぎさ「「登録販売者」受験対策講座の実施報告」(201-205頁)
- 25) 江頭万里子「秘書実務実技試験における一試み」(206-208頁)

◎佐賀女子短期大学

『佐賀女子短期大学紀要』(第53集、2019年3月)

■論文

- 1) 桑原広治「保育系学生のキャリア支援にチーム学習とディスカッションを取り入れた授業実践の効果―教科横断的内容を取り入れた5教科等の授業を通して―」(1-20頁)
- 2) 水田茂久「日本語の読みに関わる情報処理」(21-28頁)
- 3) 古川隆幸「学生の社会的養護施設への関心と実習終了後の意識の変化について―佐賀女子短期大学学生へのアンケート調査より―」(29-38頁)
- 4) 櫃本真美代「幼児期における持続可能な開発のための教育」(39-49頁)
- 5) 大江登美子「保育者養成課程における子どもの描画活動の理解を深める授業の実践と考察―活動記録とアンケートから―」(51-63頁)
- 6) 大村綾「思いやりを育むための保育者の働きかけ―幼児への言葉かけに着目して―」(65-74頁)
- 7) 桑原広治／夏目朋之「自主共同学習の仕組みづくりが保育・教育実習並びに教員採用試験等の対策に及ぼす影響―この4年間のデータを手掛かりにして―」(75-94頁)
- 8) 諸岡直「短期大学栄養士養成課程におけるアクティブ・ラーニングの可能性(Ⅱ)―産学連携による食品商品開発の効果―」(95-103頁)
- 9) 坂本一恵「地域福祉活動による『ふれあい・いきいきサロン』の課題と対策」(105-113頁)

- 10) 山口京子「養護教諭養成課程における臨床実習の成果と課題—臨床実習評価と臨床実習後のアンケート調査の結果より—」(115-129頁)
- 11) 諸岡直／小島菜実絵／尾崎加奈「短期大学栄養士養成課程における入学前教育に関する考察(Ⅳ)」(131-144頁)
- 12) 湯艶／長澤雅春(解説及び校閲)「ビジネス日本語レッスンの新しいパターンの模索—ビジネスマナーの巧みな融合—」(145-150頁)

■報告

- 11) 菅原航平「特別支援教育における教育相談の役割—学生への指導と教員へのコンサルテーション—」(151-156頁)
- 12) 小川鮎子／森恵美「レクリエーション活動と保育内容から見る子どもの体を使った遊びの一考察」(157-166頁)
- 13) 菅原航平／石橋裕子「放課後児童クラブにおける内部研修の成果と課題—佐賀県の現状から—」(167-174頁)
- 14) 大江登美子／大村綾／村岡直子／宮津百合江「実習指導のあり方実践研究Ⅲ—養成校と付属園が連携して取り組む実習指導の課題—」(175-182頁)
- 15) 長澤雅春「釜山広域市立市民図書館蔵 日帝期和書総目録(4/完)」(183-194頁)
- 16) 尾崎加奈「体にやさしい洋菓子レシピの検討—低エネルギーおよび低糖質への展開—」(195-201頁)

◎西九州大学短期大学部

『永原学園 西九州大学短期大学部 紀要』(第49巻、2019年3月)

(研究論文)

- 1) 松田佐智子／斎木まど香「市販野菜製品の保存による細菌の挙動」(1-6頁)
- 2) 津上佳奈美／西村喜文「小学校における臨床心理学的技法を用いた「心の授業」の実践(1)—描画法(スクイグル)を活用した取り組み—」(7-13頁)
- 3) 平田孝治／岡嶋一郎／福元裕二／辻裕一／和田佳奈美／松田佐智子／モハメッドノル・アンワー／尾道香奈恵／津上佳奈美／春原淑雄／赤坂久子／高元宗一郎／溝田今日子／小川智子／立川かおり／占部尊士／西田明史／川邊浩史／吉村浩美／馬場由美子／武富和美／田中知恵／西岡征子／野口美乃里／牛丸和人／米倉慶子／桑原雅臣
「学修到達度と自己評価の相互浸透に関する一考～コンピテンシーに基づく学修成果の統計分析～」(15-28頁)
- 4) 鶴和也／鈴木江利香／西敦子／古賀あけみ／中原由紀／吉村浩美「デイケアでのコグニサイズの導入～身体機能・認知機能に与える影響についての検討～」(29-32頁)
- 5) 鶴和也／吉村浩美「リハビリ職から見た介護職の魅力と課題」(33-37頁)

(研究ノート)

- 6) 野口美乃里／米倉慶子「ミュージカル創作活動と生演奏による上演の取組み～10年間の取組みを振り返って～」(39-47頁)
- 7) 川邊浩史／西岡征子／武富和美／馬場由美子／立川かおり／尾道香奈恵／津上佳奈美／井上千春／吉村浩美／米倉慶子／桑原雅臣／福元裕二「発達障害児の保護者の困り感～保護者支援、食支援の視点を中心に～」(49-55頁)

(実践報告)

- 8) 牛丸和人「保育内容(造形表現)の理論と方法及び図画工作の授業改革～保育士養成課程の見直しに基づく指導方法の工夫・改善～」(57-63頁)
- 9) 立川かおり／鍋島恵美子／吉村浩美／馬場由美子／小川智子「体験学習「遊友広場」の教育効果についての考察～留学生の入学と実施時期の影響～」(65-71頁)

◎九州龍谷短期大学

『九州龍谷短期大学紀要』(第66号、令和2年3月)

- 1) 太田心海「『無量寿経』に於ける生天思想」(1-20頁)
- 2) 松田祐子「The Three Billy Gats Gruff と『三びきのやぎの がらがらどん』 - 英語版と日本語版の違い」(21-29頁)
- 3) 余公敏子「幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園におけるリーダーシップ、フォロアーシップの検討—幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園の教職員への聞き取り調査を通して—」(31-54頁)
- 4) 植田功一「揺れる言葉とアナウンサーの役割」(55-68頁)

◎精華女子短期大学

『精華女子短期大学 研究紀要』(第45号、2019年3月)

—原著論文—

- 1) 三好伸幸/村井千寿子「教育実習における実習評価表データを活用した指導の検討」(1-9頁)
- 2) 宮本幸/志方亮介/古林ゆり「施設実習における現状と課題～学生の意識と実際の評価～」(11-20頁)
- 3) 大谷朝「ストーリーテリングにおける子どもの想像と経験—ヴィゴツキーの空想と現実の統合形態との共通性—」(21-26頁)
- 4) 朝木徹「地域の子育て支援活動を通じた保育者志望学生の学び—親子のふれあい遊び実践の振り返りに着目して—」(27-34頁)
- 5) 古林ゆり「保育内容「環境」の理解の深化を目指して②～製作あそび「ちょうちんづくり」の実践検討を通して～」(35-45頁)
- 6) 佐藤慶治「明治期の『幼稚園唱歌集』におけるオノマトペ歌曲の始まり」(47-51頁)
- 7) 佐藤慶治「保幼小連携に向けての歌唱指導法に関する考察—レパトリーの観点から—」(53-57頁)
- 8) 志方亮介「保育者養成課程における障害児保育科目を通じた学生の障害観の変化」(59-67頁)
- 9) 入江良英「『個性化』と『社会化』が融合(一致)した保育・教育の研究—「民主的人格」と真実なる「道徳教育」を求めて—」(69-75頁)
- 10) 阪田直美/安藤舞香「栄養教育実習の取り組みについて2報」(77-81頁)
- 11) 渡邊和明/庄野千鶴/芝木儀夫/金戊丁「短期大学における退学思考に関する一考察」(83-88頁)
- 12) 金戊丁「オーバーツーリズムの登場」(89-95頁)

—教育・研究資料—

- 13) 入江良英「『専門職大学(短期大学)』の可能性—「学生の質の二極化」を克服する実践と戦略—」(97-113頁)
- 14) 渡邊智美「高等学校家庭科における家事の省力化を目指した学習内容の提案—短期大学における電気圧力鍋を使用した授業実践から—」(115-119頁)
- 15) 庄野千鶴/芝木儀夫/渡邊和明/金戊丁「短期大学教育における学習成果の評価方法に関する検討」(121-127頁)
- 16) 芝木儀夫「韓国印刷文化財紀行の一提案」(129-137頁)
- 17) 本田怜奈/丸林真子/田中潤一郎/大谷朝/芝木儀夫「ユボ静電吸着[®]を用いた新しい保育教材“どこでもシアター”の開発」(139-145頁)
- 18) 緒方まゆみ「介護過程の展開に関する一考察～学生へのアンケートよりアセスメントの教育方法を探る～」(147-156頁)
- 19) 角真由美「介護福祉教育と保育士教育の統合の効果と課題に関する研究=A短期大学介護福祉士養成校の教育方法を踏まえて=研究ノート」(157-169頁)

◎香蘭女子短期大学

『香蘭女子短期大学 研究紀要』(第62号令和元年度)

- 1) 杉森映徳「子どもの絵画指導と幼児美術教育の将来性—アメリカの絵画指導を参考とした子どもの絵画製作の検証を通して—」(1)
- 2) 竹本尚未「計画生産調理へ向けた真空調理法における野菜の可食部別調味液塩分浸透の傾向」(13)
- 3) 遠矢幸子「短期大学における新入生の社会的能力と大学生生活適応感および対人関係特徴との関係について」(21)
- 4) 姫島源太郎「保育者のエプロンに対するニーズについての調査研究」(29)
- 5) 尾畑圭祐／坂元美貴子「中国(大連)国際服装紡織品博覧会参加にみる教育の効果と今後の課題」(37)
- 6) 中村洋子「保育学科の学生を対象とした一次救命処置演習の検討」(49)
- 7) 加来裕子「福祉教育における福祉のまちづくり条例の活用」(61)
- 8) 濱田尚志「外国につながる子どもと保護者への情報伝達についての演習」(67)
- 9) 麻生廣子「とろみ調整剤の種類とその使用適応」(75)
- 10) 寺地亜衣子「保育者養成校に在籍する学生の保育職への志望動機と目指す保育者像—入学時と2年次の調査から—」(83)

3. 短期大学コンソーシアム九州の合同アクティビティ活動の実績

令和元年度 短大フォーラム

○令和元年度 第4回短大フォーラム参加

日時：令和元年9月6日(金)～7日(土)

場所：香蘭女子短期大学

内容：基調講演、アイスブレイク、情報交換会、グループワーク、
パネルディスカッション

参加人数：63名

『短期高等教育研究』編集規程

短期大学コンソーシアム九州・研究センター

- 1、短期大学コンソーシアム九州は、短期大学教育に関する研究推進のために「紀要」を刊行する。「紀要」のタイトルは『短期高等教育研究』とする。
- 2、短期大学コンソーシアム九州・研究センター内に紀要編集委員会を置く。
- 3、『短期高等教育研究』の編集は編集委員会が行う。
- 4、編集委員会の委員は、研究センターの研究員5名程度とし、委員長は委員の互選とする。
- 5、編集委員会は記事の査読を行う。必要に応じて専門分野に関わる JCKK 加盟校の教職員に査読を依頼する。
- 6、投稿に関する規程および執筆に関する要領は、別に定める。

附則 この規程は、2011年10月15日から施行する。

『短期高等教育研究』 投稿規程

短期大学コンソーシアム九州・紀要編集委員会

- 1、『短期高等教育研究』には、短期大学教育に関する「論文」「研究ノート」「報告」「資料」を掲載する。
 - 1) 論文は、一定の研究成果をまとめたもので、以下の点を満たしているもの。
 - ① 課題意識の明確さ
 - ② 先行研究の位置づけの的確さ、または実践事例の先進性
 - ③ 分析を含めた論証手続きの正確さ、および論理性
 - 2) 「研究ノート」は、「論文」に準ずる研究成果をまとめたもの。
 - 3) 「報告」は、短期高等教育の実践活動についてまとめたもの。
 - 4) 「資料」は、研究の基礎となる情報をまとめたもの。
- 2、『短期高等教育研究』に掲載される記事は、他の学術雑誌に発表されたことのない、未発表のものであること。ただし、口頭発表およびその配布資料はこの限りではない。
- 3、『短期高等教育研究』の投稿者は、JCKK 関係者および短期大学に関心を持つ個人とする。
- 4、記事の掲載は、紀要編集委員会の審議を経て決定する。編集委員会は、投稿者に内容の変更を求めることがある。
- 5、原稿の提出期限は、編集委員会が定めた日とする。
- 6、『短期高等教育研究』に掲載されるすべての記事の電子公開および著作権については、短期大学コンソーシアム九州に帰属する。

附則 本規程は、2011年10月15日から施行する。

本規程は、2016年10月1日から施行する。

『短期高等教育研究』原稿執筆要領

短期大学コンソーシアム九州・紀要編集委員会

2016年10月1日制定

1. 記事は原則として日本語とする。文章は口語体で表現し、常用漢字、現代仮名遣いを用いる。
2. 原稿はA4版の用紙を縦に使い、次項以降で特に指定がない限り、横書き2段組で、明朝9pt、26字/行×40行/段で記述する。分量は、本文、図表(写真含む)、注、参考文献等を含めて、「論文」および「研究ノート」の場合は6頁以上10頁以内、「報告」および「資料」の場合は4頁以上10頁以内とする。ただし、編集委員会が認めた場合には、この限りではない。
 - (b) 句読点には全角の「。」と「、」を用いる。また、本文中の英字と数字には、原則として半角を用いる。
 - (c) 図表(写真を含む)は、本文とは別にし、原則として1図A4版1枚に記載する。それぞれ図1、図2、…、表1、表2、…、のような連続番号と題名を付け、本文中には挿入箇所を示す。なお、図と表の番号と題名は、図および写真ではその下に、表ではその上に、それぞれ書くこと。出所、注記は、図表の下に付記する。オリジナルの図表の場合は、出所を記さない。
 - (d) 写真には、その裏面に天地と著者名を書いておく。なお、印刷時は原則として白黒となる。
 - (e) 数式を本文中に挿入する場合は、改行後に全角2文字分下げるか、または、数式を別紙上に書いて、本文の欄外に挿入箇所を指示する。数式には通し番号を付けておく。
3. 原稿は、「主題(和文、英文)」、「副題(和文、英文)、省略可」、「著者名(和文、英文)」、「要旨(和文のみ)」、「キーワード(和文のみ)」、「本文」、「注」、「参考文献」、「著者紹介」の順に構成する。
 - 3.1 「主題」は、明朝ボールド20ptを用い、2行以内で中央揃えにし、2行以内で最大40文字に納める。また、「副題」は、明朝ボールド11ptを用い、中央揃えにし、最大40文字に納める。
 - 3.2 「主題」および「副題」には、英文をつける。英文は、Century標準11ptを用い、中央揃えにする。
 - 3.3 「著者名」は、ゴシック12ptを用い、中央揃えにする。
 - 3.4 「著者名」には英文をつける。英文は、Century標準11ptを用い、中央揃えにする。
 - 3.5 「要旨」は、明朝標準9ptを使い、400文字程度で、本文の内容を簡潔に記述する。行頭は1字下げる。
 - 3.6 「キーワード」は、要旨の末尾に3～5語程度つける。明朝標準9ptを用い、左揃えにする。
 - 3.7 「本文」については、次の形式に従うこと。
 - (a) 章節の見出しは、章(1.、2.、3.、…)、節(1.1、1.2、1.3、…)の2段階とする。また、節番号と見出しの間には全角で1文字分の空白文字を挿入する。ゴシック9ptで記載する。
- 3.8 「注」(参考文献を除く)は、本文中の該当箇所^{1),2),…}のように上付きで記した上で、「本文」の後に順番にまとめて記載する。
- 3.9 「参考文献」は、原則として発表し公開されているものに限る。参考文献は、以下の例に従って記載する。
 - (a) 文献を示す割注については、全角丸括弧内に「著者の氏_出版年:_始頁-終頁」の記載を原則とする。なお、「_」は半角スペース、「:」は半角コロン、「-」は半角ハイフンをあらわす。
 - ・共著の場合は、「第1著者・第2著者」の順に記載し、中黒でつなぐ。3名以上の場合は、「第1著者のほか」として「ほか」をつける。編書の場合は、「編者名編」として「編」をいれる。監修の場合は、「監修者名監修」として「監修」を入れる。英文による3名以上の共著の場合は、「et al.」を、一人の編書の場合は「ed.」、2名以上の編書のときは「eds.」をつける。

・終頁の数値のうち、始頁の数値と同じ上位の桁は省略する。

(例)「…が明らかにされている(田中1995:124-9、鈴木1998:206-15)」

「田中(2005)によれば、…」

(b) 翻訳書、翻訳論文の場合は、「原著者の氏_原書の出版年=訳書の出版年」を原則とし、頁数の記載にあたっては、訳書の頁を用いる場合は、「原著者の氏_原書の出版年=訳書の出版年:_始頁-終頁」、原書を参照して独自に訳出した場合には、「原著者の氏_原書の出版年:_始頁-終頁」とする。

(例)「…と論じている(Smith 1930=1996:51-64)。」

(c) 参考文献は、末尾に和文、欧文を含めて著者の姓のアルファベット順、年代の古い順に西暦で記し、同一著者の同一年の文献は、引用順に a、b、c…を付し、注の後にまとめて記載する。

〈図書の場合〉著者名、発行年、書名、出版社名の順に記載する。

(例) 天野郁夫(1986)『高等教育の日本的構造』
玉川大学出版部

高鳥正夫・館昭(編)(1998)『短大ファースト
ステージ論』東信堂

Cohen, Arthur M. and Brawer, Florence B. (1982),
The American Community College, Jossey-Bass.

〈論文の場合〉著者名、発行年、論文名、雑誌名、出版元、巻号、ページの順に記載する。

(例) 吉本圭一(2003)「スコットランドにおける短期高等教育を含めた資格制度と多様な学習経路の設計」『学位研究』17、51-68頁。

(例) Dowd, Alicia C., Cheslock, John J., Melguizo, Tatiana, (2008), "Transfer Access from Community Colleges and the Distribution of Elite Higher Education", *The Journal of Higher Education*, Vol. 79, Num. 4, pp.442-472.

〈翻訳書・論文の場合〉原典書誌情報(図書・論文の場合に準ずる)の後に、(=翻訳出版年、訳者名訳、図書・論文名、出版社名)を記載する。

(例) Becker, G. S. (1964), *Human Capital: A Theoretical and Empirical Analysis, with Special Reference to Education*, University of Chicago Press,

(=1976、佐野陽子訳『人的資本-教育を中心とした理論的・経験的分析-』東洋館出版社)

〈新聞記事、雑誌、辞典など〉可能な限り、上記文献記載方法にしたがい、執筆者名が分かる場合は記事名の後に執筆者を、新聞記事の場合は掲載年月日を追加する。

〈ウェブサイトから引用する場合〉可能な限り、上記文献記載方法に従い、末尾に URL と最終アクセス日を()内に記載する。

3.10 「著者紹介」は、著者全員について、表題の下に並べたそれぞれの名前の右肩に上付きの小さな記号、例えば「*1」、「*2」を明示しておき、第1頁の左段、本文下の脚注欄に、「著者紹介」と明示した後に、“所属先の名称、職階、所属先の住所、E-mail アドレスなど”を書く。

編集後記

今年度、短期大学コンソーシアム九州（JCKK）の紀要『短期高等教育研究』は、創刊から10年目を迎えました。ただ、本コンソーシアムの紀要にとっての節目の年は、世界中が、「新型コロナウイルス」という未だ人類が治療法をもたない病原菌との闘いに苦しむ年ともなりました。そのため、本紀要の編集作業も大幅に遅れ、またこれまでとは異なるやり方を模索することにもなりました。この病原菌との闘いの収束が見えないなか、この10号から先の本紀要の編集に対しては、地震や豪雨等のこれまでの災害とは異質な「目に見えないウイルス」と付き合いながら確実に仕事をこなしていく術を身につける必要性を強く感じています。

さて、本号 Vol. 10は、これまでの JCKK 研究センターが目指してきた「JCKK スタンドの確立に向けた研究」の現時点での成果をまとめたものとなっております。そのため、執筆者は、全員 JCKK 関係者です。なお、本紀要の構成は、「研究ノート」「報告」「資料」が、それぞれ1本ずつという内容になっております。具体的には、「学習成果の JCKK スタンド構築に向けて」として、JCKK の学位授与の方針（ディプロマポリシー）をテキストマイニング手法により調査分析し、中核となる学習成果目標となる「JCKK スタンド」を編集し検討することにより、その方向性を探求した論考が「研究ノート」として掲載されています。また「報告」として、学習成果の可視化を目的とする IR データの活用必要性の下、自学の事例を中心にこれまでの活動を整理・分析することにより、短期大学における調査研究活用のスタンダードを目指した「短期大学における調査研究の活用のスタンダードを目指して」が、また「資料」として、短大教育の改革・改善、向上・充実の根拠となる情報を得るため、JCKK 加盟短大で標準化した調査スタンダードの制度設計について検討することを目的とした「短期大学コンソーシアム九州による調査スタンダードの制度設計（資料）」がそれぞれ掲載されています。

なお、本号の巻頭言は、「短期大学コンソーシアム九州研究センター」のセンター長である吉本圭一先生に執筆をお願いしました。言うまでもなく、日本の高等教育研究のリーダーの一人ともいえる先生は、長崎国際大学の現理事長である安部直樹先生とともに、JCKK の前身である「短期大学の将来構想に関する研究会」を立ち上げ、JCKK 発足から現在まで、文字通り、研究面からその発展を支えておられます。本紀要は、その研究センターでの研究テーマでもあります「JCKK スタンド形成」への現時点での成果であると同時に、その完成へ向けての確かな一歩となったと考えます。

最後になりましたが、新型コロナ感染拡大下の影響があるとはいえ、今年度も、多大なる私の仕事の遅れのため、本号の編集に携わって頂いた方々に多くのご迷惑をおかけしたことを、深くお詫び申し上げます。特に、原稿を提出して頂いた執筆者の皆様と研究センターや編集委員の先生方のご協力に感謝いたします。そして、私の無理な要求にいつも誠実に対応して下さいました高野さんと昭和堂の小玉さんに心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。（編集委員長）

短期大学コンソーシアム九州紀要 Vol. 10 「短期高等教育研究」

ISSN 2188-6687

2020（令和2）年12月31日印刷

2020（令和2）年12月31日発行

発行所 短期大学コンソーシアム九州 研究センター
〒840-8550 佐賀市本庄町大字本庄1313番地
佐賀女子短期大学内
TEL：0952-23-5145 FAX：0952-23-2724
E-mail：tandai-con@asahigakuen.ac.jp

印刷 株式会社昭和堂
〒849-0932 佐賀市鍋島町大字八戸溝1449-2
TEL：0952-33-1221 FAX：0952-34-1144

